

---

# くろやみ国の番外編

やまく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

くろやみ国の番外編

### 【Nコード】

N6237P

### 【作者名】

やまく

### 【あらすじ】

「くろやみ国の女王」の番外編です。  
小話や登場人物紹介などがあります。

## 登場人物紹介（本編開始時）（前書き）

本編開始時の、ネタバレにならない登場人物紹介です。

## 登場人物紹介（本編開始時）

### 人間

#### ファム

花屋でバイトしている女の子。

親は既に死に、残されたささやかな一軒家で暮らす。

家の裏庭には彼女が大事に育てている花壇がある。

精霊にかなり慣れた対応をする。突然話しかけられても驚かず「なにしてんの？」と呆れるくらい慣れている。

黒い瞳に背中までの黒い髪。どちらも珍しいが本人は気に入っている。

#### ヴィル

ファムの恋人。約束の時間に彼女の家を迎えに来た。

丁寧な口調で喋る男性で、どうも身分が高いらしい。

### 精霊

#### 銀色の精霊

ぼろぼろの外套を着た、変な闇の精霊。

銀の髪に銀の仮面のような顔を持つ。

街角で、いきなりファムに話しかけてきた。

とぼけた性格をしている（精霊には良く有る事）

## 登場人物紹介（本編開始時）（後書き）

読む前の紹介ってどう役に立つのだろうかと思いつつ書いてみました。

## 登場人物と国の紹介（第一章終了時まで）（前書き）

いわゆる登場人物紹介です。人じゃないのかもしれませんが。

思いつきりネタバレがありますので、本編を楽しみたい方は第一章読了後に読む事をオススメします。

物語のネタバレにならないけど本編に出てない設定なども書いてあります。

## 登場人物と国の紹介（第一章終了時まで）

### 第一章終了時

#### <登場人物>

#### \*人間

#### ファム：

平民育ちの女の子。平日は花屋でバイト、週末は自分で花を売って生活していた。

幼い頃に両親を亡くし、唯一残ったごんまりとした一軒家をとても大切にしている。両親は精霊に関わる仕事をしていたらしい。

初登場時19歳

身長は165cmくらい。

豊かな艶のある黒髪とくびれたウェストが自慢。瞳も黒。

胸はDカップくらいはある。ふかふかである。

属性は闇。人間の属性が関わるのは術の適正程度。血液型みたいなもので、闇といっても珍しいだけで特に忌まれることはない。

精霊曰く、彼女は己の身体の命脈だけでなく、気脈までも自由に扱える人間。身体は天地万物の気脈に柔軟にできているらしい。

銀色の精霊と出会い、いろいろあって国を出てくるやみ国の女王になる。けっこう壮大なものを背負わされているが、本人はあんまりわかっていない。

苦労しながら家を守って来ただけあって、性格は明るく前向きで強い。物事を深く考えないタイプで、怒るときはものすごく怒るが、気が済むとけろっとしている。

（「キレイやすいのは、精霊に対してだけよ！」）

精霊にかなり慣れた対応をするが、学術的に勉強した訳ではない。

ヴィル（ヴィルヘルムス）：

はつちくこく  
白箔国の青年。

ファムと出会い、ファムが国を出る直前まで恋人同士の関係にあった。

現在は・・・？

初登場時17歳。

いつも冷静で、あまり動揺したりしない性格。  
ファムを探している。

レーヘンと戦闘になること、2回。

なんでも淡々とこなせる男。一応光属性だが法術は大体なんでも使える。精霊術も使える。

戦闘時は両手にグローブをはめて、仕込んだ様々な術式で戦略的に闘う。

ファムが行方不明になっているうちに即位して国王になった。さらにファムには年齢も身分も、正式な名前も告げてなかった。

本編中一番頑張って欲しい人物。

ルトガー：

ヴィルヘルムス配下の諜報部隊員。



ヴィルヘルムスが王になる前から知り合い。  
軽い性格。口調も軽いが、仕事はきっちりこなせる男。  
着崩した軍部の制服を着ている。

ナールデン公爵：

軍部を勝手に動かせるくらいお偉い貴族。  
ヴィルヘルムスとファムの仲を知って、ファムを消そうとした。理由は己の娘をヴィルの元へ嫁がせたかったから。その辺りの話は本編で語られる間もなく、ヴィルに拘束された。ついでに他にもやらかしていた様々なヤバい証拠を列挙された。

ファムが家を焼かれ、大怪我を負い、殺されかけ、国を出る事になった元凶。でもこの人がいなかったらくろやみ国は誕生しなかった。

### \*精霊

レーヘン：

ファムに声をかけた銀色の精霊。

はじめは銀色の仮面のような顔をしていたが、ファムに名前とともに新しい姿を創って貰う。ファム曰く「観賞用の顔」

新しい姿（本文引用）：「肩先にかかる程度の流れるような銀の髪、中性的な輪郭にすらりとした鼻梁と薄い唇。白くきめ細かな肌。そして銀のまつげにふち取られた、うつすらと青みがかった灰色の瞳。穏やかな月夜を思わせる美しい青年」

ちなみにレーヘンの希望（大熊と見間違えるような雄々しい猛者）は却下された。

細身で、身長はファムよりちょっと高い。

黒髪にもなれる。

属性は闇。ランクは特級。

ちよっととぼけた性格をしているが、精霊の最高ランクなので、やれば出来る子。

特級精霊としては若い方。千歳越えてるけど。

ベウオルクト（後述）よりピュアであぐれっしぶ。

両手を变形させて攻撃するのが得意。

500年頑張つてようやく国王になってくれたファムに敬愛の情を抱いている。

名前の由来はオランダ語の雨

ちなみに登場時に着ていたボロの外套はぞうきんになった。

ベウオルクト：

闇の精霊その2。

ランクはレーヘンと同じく特級。

顔など服から露出している箇所が布でぐるぐるまきになっている。

服装は神官のような布を沢山つけたバフバフした格好。

レーヘンの数倍長く活動している。くろやみ国の前身の暗病国あんびょうこくのころからいるので、ある意味生き字引。

名前がどうなるうとなんだらうと、国が存続してくれていたら嬉しい。

城、特に王の間の管理にこだわりがあるらしい。  
軽い引きこもり。必要な時以外は俊敏に動かない。

気配なくとも本文中になくても、基本的にいつもファムの傍に控えている。

布の下顔は大昔の偉人の模造だが、放置していて癒着してでろでろになっているので、ファムに見せられない。けど一応銀髪。  
レーヘンよりちょっと小柄。

名前の由来はオランダ語の曇り

旅の精霊：

白箔国内でファムを助けてくれた。

大地属性の一等級精霊。

本来は髪は薄い水色で、瞳はターコイズブルーをしているが、人間の街にいるときは偽装している。

首から下げたポーチには様々な種が入っている。

世界中の土壌を調べて回っている。趣味らしい。

13〜4歳くらいの可愛い少年の姿をしている。

気さくで明るい性格。

オーフ：

白箔国に仕える光属性の特級精霊。

ずっと人間の傍で活動しているため、人間社会に馴染んだ価値観を持ち、人間に対してレーヘン達よりまともな会話、まともな対応を

する。

流れるような輝きをもつ黒髪と、美しいまつげを持つ。中性的な美しい顔立ちで、男なのか女なのかわからない姿をしている。でも一応男性の姿です。  
身長は高い。

名前の由来はオランダ語の目

\*その他の存在

西の祠の妖精：

白箔国首都の城壁の外、西の野原の片隅に存在する石の祠にいる妖精。

簡素な格好をした老人の姿をしている。

ファム曰く「意外な姿だけど、可愛いおじいちゃん」

国

白箔国：

ファムがいた国。街並みが白い。宮殿を中心として広範囲に街が発達している。

平地が多く草原が広がる国。

暗病国：

くろやみ国の前身。

大昔は栄えていた大国だった。が瘴気が渦巻き始め生物がほとんど絶え、国民もいない状態だった。

精霊はかろうじて二名いて、ほぼそと国を守り続けていた。他国では子供にきかせるお伽話に出てくるこの世の果てに闇の国としてよくない印象だけがかろうじて知られている。ほとんど忘れ去られた国。

島国で、陸地は昔に比べてだいぶ減っている。また城にはかつての大国の遺物や、施設が沢山保管されている。

## 登場人物と国の紹介 2（第二章終了時まで）（前書き）

第二章から出て来た人の紹介です。人でないものもあります。

第三章開始時までの状況などもざっくり軽く書いてあります。

初登場時すぐに名前がでてこなくて、話の途中で命名されたりするキャラなどもあります。

オマケで本編で言及されていない設定とかも書いてます。

## 登場人物と国の紹介 2（第二章終了時まで）

### 第一章から継続

ファム：

くろやみ国の女王。19歳、女性。

ヴィルに会ったため無理矢理城を出て死にかけ、一ヶ月眠るはめになった。

時々髪が銀色になるようになってしまった。

王の間で影霊という精霊を創れるようになってしまった。

レーヘン：

くろやみ国の特級精霊。

基本的にファムの身边護衛と目の保養とボケ担当。

ベウオルクト：

くろやみ国の特級精霊。国内で一番の古株。

ファムの教育に闘志を燃やす。

旅の精霊：

大地の一等級精霊。

ファムを助けてくれた。

趣味は世界の地質調査。くろやみ国の土地を見て回ったが、何も言及せずに国を出たので土の状態はまだよくないらしい。

ファムに黙って植物園に勝手に果樹園をつくった。一応あらゆる果

物がある。

ヴィルヘルムス：

はらうこく  
白箔国の国王。

ファムが白箔国にいた頃、恋人関係にあった。  
ファムからはヴィルと呼ばれている。

以下第二章から

影霊

ハーシエ：

ファムが初めて創った影霊。

核はファム愛用の櫛。

創る時ファムがごちゃごちゃ考えていたので、色んな姿をとれる。

普段は子ウサギの姿をして王の間でファムを癒しているが、必要なときは銀髪の方の姿になることができる。

喋り方はファムよりお上品。ただしまだ思念で創造主の方とだけしか会話出来ない。

マルハレータ：

影霊その2

影霊として復活した過去の女王。この頃は血族即位なので幼い頃から帝王学を学ばされ、11歳で即位。大戦時代なので戦争も指揮し、自らも前線にたつて殺しまくって破壊しまくった。



後世の呼び名は「血霧の女帝」

これは空気の振動を使う広範囲攻撃（法術より原理の簡単で広範囲殲滅ができる気操術）で、血が霧のように舞ったことに由来。

一見冷静なようでいてかなり凶暴な性格をしている。

9センチヒールを過去の優れた技術と美女補正で平気な顔してはきこなす。

ワイシャツに黒のパンツ姿。メンソールタバコとか似合いそう。  
ネイルには法術の仕込みがある。

外見年齢28歳

生前は黒髪 現在は銀髪。雨雲のような灰色の瞳。

メイクはアイメイクとリップだけ派

散々おちよくられたレーヘンに対して苦手意識を持つ

ベウオルクトと面識有り？

胸はAもしくはB。あまりこの部分の話を探ると粛清されます。

ローデヴェイク：

影霊その3

マルハレータのペンダントから復活。

彼女の時代の将軍をしていた。戦闘中に死亡。

あだなは狂狼。女王には絶対服従だけど戦闘狂だったから。

当時は彼の方が年上だったが、死んだ年齢が違うので蘇ったら同年になってしまった。

元々工員志望だっただけあって、機械工作とか得意だったりする。  
かなり感覚が鋭く、神経質が増長してキレやすい性格になったといえる。

外見年齢28歳。

銀髪でぎらつく灰色の瞳。

図体でかくて顔はそこそ良いが表情と目つきでかなり恐い。  
身長は2mを超える。サヴァより大きい。

## 人間

サヴァ：

初登場時21歳の緑閑国<sup>りょつかんこく</sup>出身の青年。

深緑色の短く刈られた頭髮と深い緑の瞳。目元を中心に顔の三分の一ほどが鱗のように堅く変質している。特に左目は爬虫類のような瞳孔をしている。他の肌にも鱗のような変質有り。

性格は幼い頃から外見で差別されたり嫌悪されて来た影響で無口で消極的な所がある。

もの静かで大人しいけれど、戦闘能力はかなり高い。

190くらいは身長ある。かなり細身。針金のような筋肉。

8〜12歳ごろに国の騎士団に入団、かなり早いペースで出世して隊長格くらいまでいつていた。

とある騎士団に会ったたびにスカウトされていたが、妹がいるので断っていた。

体内の竜脈の力を完全にコントロール出来ていないので素手で闘うのが苦手。相手を殺さずに戦おうとすると槍や棒をえらぶ。剣でも威力がありすぎて相手をまっふたつにしかねない。なんとという厨二。でも力の暴走はない。本人が穏やかで安定感のある性格をしているから。

純粹な肉弾戦だとマルハレータ達と良い勝負するくらい、腕とセンスはある。

なにもなければ本屋とかパン屋とかやってそう

ゲオルギと海洋漁業してるので、現在の職業は漁師。

ライナ：

初登場時12歳の少女。

サヴァの元でシメオンと三人で暮らしていた。でも身体のことがあるから入院が多かった。特殊体質を怪しい集団に目をつけられ、攫われて実験されかけて症状が一気に進行、くろやみ国へ来る事に。病の症状は身体の透明化。苦痛と麻痺と恐怖が襲う。

ファム女王が治療して、絵で描いて説明した方が早い外見になってしまった子。健気だけどころりしている。新たな自分の姿を確認した際は、羽根や角よりも髪の色を気にしていた。

胸はAカップ。これから成長予定（本人談）

シメオン（後述）のことは家族の感覚で接している。

シメオン：

初登場時13歳の少年。

明るい黄緑色のさらさらした髪に、女の子のように整った顔立ち。青みがかった緑の目。

幼い頃の経験からかなり殺伐とした側面を持つ。ライナがいなければ殺戮マシンのような人間になっていた。

ライナとその他に対する言葉遣いや表情がかなり違う。

緑閑国で神童と呼ばれた。文武両道良く出来る子。法術も精霊術も基礎だけ学習した後、オリジナル構成して駆使している。

竜脈の影響があるであろう高スペック。だが外見は普通の綺麗な顔立ちの男の子。中身を調べても普通。ベウォルクトが密かに詳しく調べたがっている。

ライナを実験につかった怪しい集団を滅ぼし、裏に大御所の人物も

いたので身の安全のために国外追放の措置をとってもらった。  
策略とかできちゃう子だけどライナが欠けると一気に精神面に安定  
がなくなる。極端な子。

身長はライナと同じくらい。これから伸びる（本人談）。

#### 生き物

ゲオルギ：

緑閑国の竜。

竜の言葉を知っていると会話ができる。レーヘンと仲が良くなる。  
いったん帰国しようとしたが途中シメオンと合流して戻って来た。

人？

イグサ族：

ベウォルクトがイグサ族と呼んでいる。くろやみ国先住民族。  
背が低く、手足が太くて、顔には大人も子供も皆地面に生えている  
枯れかけの草と良く似たものもじゃもじゃと生えている。男女の  
区別方法は不明。

イグサ族は30人程の集団で生活していて、基本的に島の沿岸部を  
なぞるように移動しながら生活している。

身体に草を編んだマントのようなものをまとって、遠目からだ  
と酒れ草の固まりに見える。

もこもこ毛の動物を連れている。たぶんこの毛も生活に使用してい  
る。

鍋に入れた海水を火にかけて沸騰するやり方で蒸留して、塩と真水  
に分けて生活に使っている。主食は海藻と、魚介類。

ちなみにくろやみ国近辺の海で採れるものはファム達大陸からきた

人間の体には合わない。

イグサ族には長い間滞在する場所もあって家のようなものもあるが、そこは遠いらしい。

ファムは初対面で友好を確立することに成功した。

ベウォルクトはイグサ族の事を色々調べているらしく、通訳も出来る。

国  
白箔国：  
はうばくこく

ファムがいた国。交易で栄える。歴史もあり優雅な国。

現在ヴィルヘルムスが王様をやっている。

光属性が多い国。

緑閑国：  
りょつかんこく

青嶺の山脈と深い森の中にある小国。白箔国と青嶺国に隣接。

シメオンが引き起こした事件や、もとの内部の腐敗で今弱体化しまくっている。古い価値観の国。色々大国の青嶺国に頼っている。内輪のごたごたのせいで属国秒読み。

竜の産地と天然石で有名。

青嶺国：  
しやうりやうこく

海を挟んでくろやみ国のお隣の国。よく戦争しているらしい。

赤麗国：  
せきれいこく

青嶺国と並んで戦争が多い国らしい。

登場人物と国の紹介 2 (第二章終了時まで) (後書き)

2011/05/30 国によみがなりました。

登場人物と国と団体の紹介 3 (第三章終了時まで) (前書き)

第三章本編と

第三章関連の番外編の

登場人物と国と団体の紹介です。



### 登場人物と国と団体の紹介 3（第三章終了時まで）

ファム：

くろやみ国の女王。この国の方針はこの人によって決められている。  
城のシステムにだいぶ慣れてきた。

レーヘン：

くろやみ国の精霊。主にボケと目の保養担当。  
ボケではいるが隙はない。（多分）

ベウオルクト：

くろやみ国の精霊。  
最近城の修理に力を注いでいる。  
国土の管理、調査も積極的におこなっている。  
精霊ランキングの編集メンバー

ハーシエ：

くろやみ国の影霊。  
創造主のファムとしか思念で会話出来なかったが、最近言葉をつか  
えるようになった。

うさぎの姿だけでなく、人間の姿をとる時間も長くなってきている。

ライナ：

くろやみ国の少女。  
知らない人間が怖い。

女王の事が大好き。

シメオン：

くろやみ国の少年。

ライナの身に何かがあると即効でブチ切れる。

ローデヴェイクに叩きのめされた際にその事を言われ、悩んでいる。くろやみ国へ来る前に大陸で悪名を覇せたので、国でおとなしくしている。

サヴァ：

くろやみ国の青年。

元緑閑国の騎士だった。その頃は竜槍と呼ばれちょっと有名だったらしい。

魚捕りをしているが、自分にもっと何かできることはないかと考えている。

ゲオルギ：

くろやみ国の竜。

元々緑閑国の所有だったが、脱走してきた。

サヴァの騎竜。卵から育ててくれたサヴァとは互いの分身かのように連携して動くことができる。

レーヘンとは会話できる。

## 海賊「黒堤組」こくていくみ

くろやみ国近辺を主な活動領域とする海賊

首領格は代々マヴロと名乗る。

最近代替わりした。

くろやみ国のように過去の遺産もいくつか所有しているが、持っているだけで完全に扱えているわけでない。

一つの街ほどもある巨大船を母船として、様々な移動船を所有している。

## 黒堤組の人間

カラノス：

黒堤組の組頭。

首筋の中程までの黒い髪は波のように豊かに波打つ。要するに天然パーマ。

はつきりした二重の目は左が黒で、右は透き通った青い瞳。

いつも不敵な笑みを浮かべている。

よく動く表情。サヴァほどではないが体格も良い。

整った容貌は女性にもてそう。（byファム）

人懐こい性格だが観察眼は鋭い。

欲しい物は即効で捕りに行く性分。そのせいでファムに即効でキレられる。

腰布に四本も剣を差している。

うち二本は精霊らしい。

左手には法術用の黒のグローブをはめている。

黒堤組の仲間たち：

若い側近が多く黒髪が多い。

血の気も多く先走って行動する輩もいる。

お頭のカラノスに対して物言いが容赦ないところがある。（その分信頼関係が築けているとも言える）

法術師や竜使いなど、人材は豊富な模様。

### 黒堤組の精霊

コトヒト：

かつて暗病国の精霊だった。一等級精霊。

普段は剣の姿で黒堤組の守りの精霊の一体として存在している。

人の姿は、中性的な若者で、灰色の髪を一本の三つ編みにして、やや濃い灰色の瞳をしている。房飾りのついた墨色のゆったりとした上着と揃いのズボン、布で出来たサンダルを履いている。

シシ：

黒堤組の組頭の護衛精霊。普段は剣の姿をしている。

灰色の、毛の長いライオンのような姿。ふさっふさである。

コトヒトがいつも手入れている。

普段は剣の姿をしていて、マヴロの指示や、危険が迫ったときに獣の姿になる。

元々は人工的に精霊を作り出す実験体のうち一体で、コトヒトが黒堤組につきあうのはシシのためでもある。

???

” くの騎士 ”

大空騎士団の競闘大会に一般参加として参加した全身黒い鎧に包まれた戦士。

突如現れたにもかかわらず、圧倒的な強さを誇り、騎士達と闘っていく。

得意武器は槍。 槍としての使い方の他に薙刀のように振り回すこともある。 要するに ” 剣のように槍を扱う ” という、かなり無茶苦茶な使い方をしている。

その正体は・・・

彼の活躍のおかげで大会勝者をあてる賭博会は大混乱になった。

黒髪の青年：

肩に乗った黒い小鳥とよく漫才をしている。 事情があって闘技場内に入れないらしい。

灰色のシヨールの女性：

“ くの騎士 ” の武器を届けに来た。

黒い小鳥：

黒髪の青年にツッコミをいれる

大空騎士団・・・大陸で最も規模が大きい騎士団。いくつかの国の支援によって騎士団として独立しており、大陸にその名を轟かせている。誰でも参加できるという意味合いから大空。

#### 大空騎士団の人間

エシル：

大空騎士団の団長。

紫の髪に紫の瞳の男性。

深くよく響く声をしており、いつも堂々としている。実力も騎士団トップクラス。

ユリアの事を大切にしている。想いが届いているかは不明。仕事に手抜きはないが、自分に都合よく動かすのも巧い。

ユリア：

大空騎士団の副団長の女性。

細い銀フレームのメガネをかけ、深く澄んだ湖のような水色の瞳に、やや緑がかった青色の髪を肩のあたりでゆるく束ねている。大人しい、「図書館にいるのが好き」と言いそうな外見（あくまでも外見の話）

かねてからサヴァの噂を聞いて、故郷も近いこともあり、憧れをいだいていた。（not恋愛）

エシルに対しては、想いはいちおう理解はしているが受け止められていない。

あまりそっち方面で感情が動かないらしい。

メールト：

”くろの騎士”と闘った騎士その1。負けた後、かの者について質問された。元々法術がメインの騎士で、今大会は戦略を練りに練って参加し、本戦まで進んだ。その分析眼から”くろの騎士”の闘い方の特徴を正確に読み取っていた。

ユミット：

”くろの騎士”と闘った騎士その2。二本の剣を扱う。かなりの実力者で、前回大会の三位入賞者。実力者と闘う事に喜びを見出すタイプ。丁寧な言葉づかいをする。武器マニア。

青峰国関係者

ジェスル：

大空騎士団の青峰部隊の管理者。

紺碧色の瞳にまっすぐな青い髪。

友人の依頼で闘技場を駆けまわった。

巻き込まれ体質。

赤麗国関係者

紅濫將軍：  
こうらん

赤嶺国の騎士で、軍属。

紅の髪がぼさぼさすぎて目元が隠れている。

明朗快活な性格だが、凶暴。

サヴァより大きい。かなり強い人。前回の大会優勝者。

頑丈な武器を沢山持っていたが最近銀髪の人物とやりあって破壊してしまっらしい。

白箔国関係者

ルトガー：

白箔国から派遣されている人物。赤麗国に現れた銀髪の二人組を追う途中で闘技場に寄った。金の小鳥を連れている。



第一回拍手お礼詰め合わせ（設定ネタ）（前書き）

第二章終了時くらいの話です。

## 第一回拍手お礼詰め合わせ（設定ネタ）

ベウオルクト「ご声援ありがとうございます。折角ですので、お礼にささやかですが我が国民の情報を公開いたしましょう」

髪の長さ（短い順）

サヴァ

ローデヴェイク

マルハレータ（前髪は長い）

シメオン

レーヘン

ライナ

・

・

ファム＝ハーシェ

身長

ライナ

シメオン

・

・

ファム＝ハーシェ

マルハレータ（ヒール無し）

ベウオルクト

レーヘン

サヴァ

ローデヴェイク

### 体重

<<女王権力により機密情報となりました。>>  
レーヘン「公開できる分で紹介しますと、一番軽いのはうさぎ状態  
のハーシエで、一番重いのはゲオルギです」

### 年齢

ハーシエ（0歳）

ライナ

シメオン

ゲオルギ

ファム

サヴァ

ローデヴェイク（享年＋復活後）

マルハレータ（享年＋復活後）

数百年

レーヘン

・  
・  
・

・  
ベウォルクト

ハーシェ「せっかくの雑談スペースですので、皆さんからアンケートをとってみました」

好きな食べ物、苦手な食べ物について

ファム「甘いもの、美味しいものはなんでも大好きよ。高級すぎる食べ物はちよつと苦手かも」

ライナ「豆料理と根菜が好きです。苦手なのは脂っこいものと、あの、兄さんが作ったシチューが・・・」

シメオン「ライナが作ったものは何でも好きです。どれもおいしいんです。知らない人がくれる食べ物が苦手です」

サヴァ「好物はとくにない。昔一度だけ菓子を作ったが酷い味だった」

ゲオルギ「ギュー」（レーヘン訳：歯ごたえのある果物が好きだそうですね。苦手なのはミミズだそうですね）

マルハレータ「水。粘っこいものとはさばさしたもんが食べにくい」

ローデヴェイク「肉だな。肉」

マルハレータ「こいつは玉葱が嫌いだ」

ローデヴェイク「うるせえ！」

レーヘン「応援ありがとうございます。御礼として先日行われた国民体力測定の様子を一部公開しましょう」

足の速さ

## <測定方法>

- ・ 練兵場にて200m走
- ・ 術使用・・・なし

(測定者：レーヘン、ベウオルクト)

<結果：早い順>

ローデヴェイク、ゲオルギ（飛ばない）

サヴァ  
(鎧無し)

シメオン

マルハレータ（ヒール有り）

ハーシエ（人型）

ファム、ライナ（ライナが2回転んで、途中から一緒に歩いた）

ファム「ぜー、ぜー、ああ体力ずいぶん落ちちゃってるわ。ライ

ナ大丈夫？ 足に怪我してない？」

ライナ 「大丈夫・・・です。ちよつと擦りむいただけで」

ファム 「マルハレータはなんであの靴で走りきれるのよ・・・。

シメオンはライナのこと気にしつつちゃんと走りきったわね」

ライナ 「立ち止まったら1時間口をきかないって約束したんです」

ファム 「それ脅しになるのね・・・」

レーヘン 「お疲れさまです、ファムさま」

ファム 「ねえ、どうしてかけっこに精霊が入ってないの？」

レーヘン 「我々はその気になれば音速くらいは出せるので、一緒に走ってもあまり意味が無いですよ」

ファム 「そ、そうなの・・・精霊って凄いのね」

レーヘン 「応援ありがとうございます。御礼として先日行われた国民体力測定の様子を一部公開しましょう」

## 腕力

<測定方法>

・腕相撲

・術使用・・・なし

・全員一緒だと危険なので二部にわけ実施

(測定者：レーヘン、ベウオルクト)

<結果：強い順>

(一部)

ローデヴェイク

マルハレータ

サヴァ（鎧無し）

シメオン

（二部）

ライナ

ファム

ハーシェ（人型）

マルハレータ「おまえ、手を抜きやがったろ」

サヴァ「加減がうまくできないんです」

マルハレータ「つぶれる勢いで一度やってみるよ、ほら」

サヴァ「いや、潰すのはちよつと・・・」

マルハレータ「おれは影霊だから平気だ。やってみるよ」

サヴァ「・・・遠慮します（背後からローデヴェイクが睨んでいるんだが）」

レーヘン「どうして今回精霊はいないんですか？」

ファム「アナタなら冗談で手を刃物にしてマルハレータと勝負しかねないと思ったのよ。あとベウォルクトがローデヴェイクに本気で何か仕掛けそうだったから」

レーヘン「なるほど」

ファム「いちおうこれ真面目な体力測定なのよ」

銀色のものがたり (第一章読了推奨) (前書き)

本編 第一章を読了後に読む事をお勧めします。



## 銀色のものがたり（第一章読了推奨）

ワタシが生まれたとき、すでにこの国には人間がほとんどいませんでした。

そしてワタシの成長が落ち着く頃には、精霊もほとんどいない状況になっていました。

そしてとうとうこの大地にはワタシと、今はベウォルクトという名になった闇の精霊が残ったのです。

ワタシは人間の定義の仕方では特級と言うタイプなのですが、特級精霊は生まれてしばらくは誰とも会わず、ひっそりと世界を学ぶのです。どう学ぶのかはファムさまにわかるようにうまく言葉では説明が難しいのですが、精霊の世界というのがあって、そこで大きくなるまで過ごすのです。

そして成長した特級精霊は、たいていどこかの国に所属します。これは精霊の世界での決まりで…ええそうです。ベウォルクトも特級精霊ですよ。

ああ、先日助けてくれた大地の精霊は一等級の精霊です。

人に似た姿をしているのは一等級以上、

それ以外の姿で意思疎通が出来るものが二等級、

さらに意思疎通が難しいものが三等級、

そして姿も形も不確かなものを薄級といいます。

ちなみにすべて人間側が決めた定義ですから、ワタシやベウォルクトは全ての精霊と意思疎通ができます。

成長してから過ごした数百年は、あまり記憶に残っていません。ベウォルクトと会話した回数もそうないし、お互い城のどこかで過ごして数十年会わないなんてのもよくあることでした。会話する用事がなかったのです。

ベウォルクトは、ワタシより遥かに長い年月を過ごし、この国に沢山の人がいた頃の事も知っています。ですが全ては過去の事。過去の情報はワタシも『生まれた時からすでに知っています』ので、ワタシはベウォルクトに昔話をせがむ事などありませんでした。

あの頃の事は…そうですね、すぐに思い出せる範囲ですと、城の設備の点検や、国に生えているかれぐさ涸草を数えて過ごしていましたね。

それからまた時が経ち、気がむくと世界中の精霊達からくる情報を眺めていたワタシは、ふと、この国の王をよそから連れてくる事を思いつきました。

何かを思いつくなんて久しぶりの事でした。もしかしたら、生まれて初めてだったのかもしれませんが。

ワタシはその思いつきに興奮し、さっそくベウォルクトに相談しました。ベウォルクトもワタシの考えに同意し、どのような人物がふさわしいか話してくれました。

そしてワタシはベウォルクトに国の管理を頼み、生まれて初めて国の外に出て、王になってくれる人を探しました。

すべて手探り状態からでした。

知っているのと実際に見てみる事はまったくの別物でした。人間

のたくさんいる街に驚き、闇の属性を持つ人を見つけては声をかけようとしたが、緊張してしまい、落ち着いて声をかけられるようになるまで百五十年ほどかかりました。それからその土地の言葉で話しかけることに気がつくまでに五十年。会話が成立するまでに二百年ほどかかりました。

いやあの、ずっと立ちっぱなしという訳ではないですよ。

定期的に国に戻っていましたが、適正に合った人が生まれるまで待つ事もありました。

闇属性で、気脈を扱えるというだけでも数十年に一度生まれるかどうか分かりませんし、かつ元氣のある方で、この国の王になつてくれそうな人物というのは、本当になかなか見つかりませんでした。

そしてようやく、ファムさまに会おう事が出来たのです！

ファムさまはとても素敵な方です。

ワタシに新しい姿をくれましたし、身体もあつたかくてやわらか……わっ！

「枕投げないで下さいよ」

「アンタが変な事言出すからよ！　そして避けないでよ！」

「ファムさまが昔話をしろと言ったんじゃないですか」

「もう、寝るわ！」

そう言つてファムさまは毛布を引き上げ、しばらくすると本当に寝入ってしまった。

ワタシは床に落ちた枕を拾い、ベッド脇のテーブルにそっと置いた。

「本当に、来てくれてありがとうございます、ファムさま」

あなたがいなくなるという事に対して、ワタシは恐怖を覚えるようになってしまった。

治療中に誤作動が起きた時も、今回も…

実は、ベウオルクトと話し合った結果、体内がすっかり落ち着くまであえてずっと眠ってもらっていたのですよ。

こんなことは、もう二度とあってほしくないですから。

あの男は邪魔です。ファムさまの心を、意思を乱します。できれば消してしまいたいです。

白箔国のが守っていますが、頑張ればワタシひとりでも対処できるでしょう。

けれど…消せばファムさまはワタシを許さないでしょうね。きっと枕を投げるどころでなく怒るのでしょう。

ベウオルクトにも軽率だと注意されました。

ワタシは眠るファムさまに触れた。

肌に触れると、呼吸している、生きている事がわかる。

ワタシの声に答えてくれた人。願いを受け止めてくれた人。

人間の命は、とてももろい。

ワタシのすべてをかけて守ります。

どうか、幸せになってください。

ワタシのたったひとりの王なのだから。

**銀色のものがたり (第一章読了推奨) (後書き)**

ちよつと設定の補完っぽい内容なので番外編に分けてみました。  
例によって詳しい後書きは活動報告ページに書いてます。

**薔薇の日（本編開始前）（前書き）**

本編が始まる前のファムとヴィルの話です。

## 薔薇の日（本編開始前）

今日は一年のうちで一番忙しくて、稼げる日。私も日が出ないうちから働き通しだったわ。

数日前から市場から届けられる花を受け取ったり、ラッピング用の準備をしたり、鉢植えを飾り付けたり…当日はいつもの何倍もの作業が待ち受けていた。

「じゃあ、これで失礼します」

「おつかれさま、ファムちゃん」

「お疲れさまです」

忙しかったけど、花を買って行く人たちの、贈る人を思ってうかべる笑顔に心が温まった。

夜遅くになってようやく店の仕事が終わり、私は家路を急いだ。  
道行く人たちはほとんどが赤い薔薇を持った恋人同士で、しかもみんな密着して歩いている。

私は薄手のコートの襟を閉じて、ポケットから小ぶりの包みを解いてあめ玉を取り出し口に入れた。甘酸っぱいサクランボ味に思わず吐息が漏れる。

小道から広場に出ると、やっぱり恋人達だらけ。ガス灯に照らされたベンチのいくつかには密着した二人組が座っている。あら、あの隅にいるの、お菓子屋の二人かしら…いつのまにくっついたのかしら

見知った顔も見知らぬ顔も、皆それぞれの甘い世界に浸っている

のを眺めて、自分には帰っても冷えきった家が待っていることを思い出した。

「今日は疲れたし、何か暖かい物でも買って帰ろう」

「ではその通りに新しく出来たデリカテッセン（総菜屋）はどうですか？ 今夜はサーブिसでホットワインがつくそうです」

「それって素敵！ コロッケはあるかしら？ …ってヴィル？」

振り返るといつの間にか後ろにヴィルが立っていた。口に手をあててなにやらクスクス笑っている。

「お疲れさま。ファム」

「ちよつとなんて格好してるのよ！ 風邪ひくわよ！」

マフラーもコートも無いじゃない！ 慌てて私の黒いマフラーを外してヴィルにぐるぐると巻き付けた。

「そのカフエにいたんです。窓からあなたが見えたから思わず手ぶらで出て来てしまいました」

「何してるのよ。取りに行きましょう」

「はい」

ヴィルの手をとって歩き出すと、さっきまで重く感じていた体が嘘のように軽くなっていた。

「飲食店も特別な飾り付けをして遅くまでやっているそうですよ。行きませんか？」

「今日は疲れているから、あまり華やかな場所に行きたい気分にならないわ。それに、こんな手だし」

沢山の薔薇を扱ったからあちこちトゲがささってまだちくちくする。

目の前で軽くひろげた私の手を、ヴィルはそつとつかんだ。

「ヴィル？」

「手がこんなに荒れてしまっ…」

「み、水仕事が多いから…」



ヴィルは私の両手を自分の両頬にあて、目を閉じて深呼吸した。  
「こうしていると、ファムに包まれているような気持ちになりますね」

私は手をのばしているだけなんだけど！

腕が疲れて来たので、ヴィルの頬を両側からつまむ。

「ならもつと幸せそうな顔しなさいよ。こう、口の端を横に伸ばして、上に持ち上げるのよ！」

私がむにむにと頬を引っ張ってあちこちに動かすと、ヴィルは驚いたように目を見開いて私を見て、それから自分で頬の筋肉を動かした。

「こ、こうですか」

「そうよ、もつと大きく、顔全部の筋肉で動けばもつと素敵になるわ」

「そういった笑みはした事が無いのですが…」

「練習と、気持ちがあれば自然にできるわよ」

「気持ち…ですか」

「そうよ、心の底からの気持ちよ」

「できたら何かいいことがありますか？」

期待した目をしているわね。こういう時だけヴィルの瞳は雄弁になる気がするわ

「素敵な笑顔ができれば、私からご褒美をあげましょう」

私はお手本のつもりで目一杯の笑顔で彼に抱きついた。

「では努力します」

「それにしてもヴィル、今日は突然どうしたの？ 次の約束の日はもつと後よね」

カフェから荷物を取って戻って来たヴィルは手に持っていた白いマフラーをゆつくりと私に巻き付けてきた。なにこのマフラー、ものすつごく柔らかくて、感動するくらい手触りがいいわね！

「今日は薔薇の日の行事が沢山あって、色とりどりの薔薇を見てい

るうちにファムに会いたくなっただけです」

そんなこと言われて一気に顔が熱くなってきた。耳まで熱痛い。

「そ、そういえば今年はやけに街の飾りが多かったわよね。通りのあちこちで芸術家の作品を飾ってあるの、見かけたわ。国が働きかけて街中も薔薇で飾られていたし。お偉いさん達もたまには素敵なことをしてくれるのね」

「ええ。…楽しかったですか？」

「うーん、どうしてか知らないけど他の街は色んな薔薇を使っているのに、この街だけ赤い薔薇だけで飾るって指定があったらしいの。おかげで店に置く赤い薔薇が足りなくて、隣町まで買いに走らされて大変だったわ」

「そうですか…」

「どうかしたの、ヴィル」

「いえ、ここ数日の疲れがちょっと…」

「大丈夫？ 体調悪いならもう帰る？」

「いえ、平気です。慣れてますから」

「そ、そう？ あ、そうだ」

私は鞆の中から紙袋を取り出した。

「これね、ジャムにする予定で貰った売れ残りの花なんだけど…」

一番綺麗な形をしている薔薇を取り出して、そっとキスをする。

「はい、『あなたに幸せが訪れますように』！」

そう言って笑顔で薔薇をヴィルの胸元のポケットに飾る。

「今日は薔薇の日だったから、こうやって薔薇を売ったのよ」

「…キスをして？」

「ええ。幸運のおまじないなの。特別料金の大薔薇を買ってくれた中で、希望するお客さんにおまけです。これは売れ残った普通の薔薇だけ」

薔薇の日は元々ある貴族の女性の事が好きだった平民の青年が、

妖精が作った薔薇に想いを託して贈った昔話が元になっている。その愛の告白の伝説にちなんで、うちのお店では売り子をその妖精に見立て、薔薇にキスをして幸運のおまじないをかける演出をした。店長がこういった事考えるのが好きなのよね。

「あなたはおまじないつきで何本売りました？」

ヴィルは胸元の薔薇を見つめながらつぶやくように言った。

「え…白が4本とピンクと黄色が3本だったから…たぶん10本かしら？ 私ほとんど薔薇を買いに行ったり花束を作っていたから売り子に長く立っていなかったの」

「そうですか…」

ヴィルはため息をついた後、ゆっくりと私の腰に腕をまわして抱きしめて来た。

「どうしたの？」

「10個ください」

「ええ？ な、何を？」

「幸運のおまじない、私にください。10個、いえそれ以上。そうでないとあなたがばらまいた幸運を探して街中を駆け回りたくなる」

えーとつまりそれって

「妬いてるの？ 花にちよつとキスした事が？」

「ええ、ものすごく」

そんな真剣な目で見つめられても…

「赤い薔薇にはしなかったから良いじゃない」

「でも、キスは贈ったんですね」

「そ、そうだけど。あのね、ヴィル。ここ道の真ん中よ？」

押しの強いヴィルから逃げるように私が早歩きで先に行こうとすると、彼は手を掴んできて引き止めてきた。

「貰えないなら私からおまじないをしますよ」

「それ何回やるつもり？」

「何回がいいですか？」

「わ…わかんないわよ！」

ヴィルの目がなにより本気だったので、私はポケットから飴の包みを取り出して、すばやく中身をヴィルの口に放り込んだ。

「それ食べて我慢してちょうだい！」

歩き出して数歩、まだ立ち止まったまま無言で飴を食べているヴィルを振り返る。

「う、うちに着いたらおまじないしてあげるわ！」

投げつけるように言くと、ヴィルは目を見開いて、それから微笑んだ。さっき指導したとおりの笑みだわ。

「初めてあなたのお家に招待してもらえました」

「さ、さつさと暖かいご飯と、ホットワイン買って帰りましょう」

あの日はヴィルの胸元を飾る赤い薔薇が目に入るたびに、胸のうちがくすぐったくなってしまうがなかったわ。

ちなみに、その時の私はかなり動揺していたので、背後でちいさくつぶやくヴィルの声に意識が向いていなかった。

「街中を飾るのはやりすぎましたか…」

「薔薇の日」は、想いを薔薇に託して相手に贈る日。

白い薔薇は尊敬の証

黄色い薔薇は友情の証

ピンクの薔薇は感謝の証

そして赤い薔薇は情熱的で、真摯な愛の証

あの日、私の街を赤い薔薇で飾るように誰が指示したのかを知ったのは、ずっとなんと後になってからだった。

## 薔薇の日（本編開始前）（後書き）

ファムの勤める店は普通の花屋ですがサービス旺盛で商売熱心。ちなみに妖精って、あの妖精とおなじような外見です。

薔薇の意味は花言葉を元にしていて、本来はもっと細かく複数の意味があります。

焼けば良いってものじゃない(第二章後半頃)(前書き)

第二章後半頃の話です。

## 焼けば良いってものじゃない(第二章後半頃)

「うーん、今度またお城の資料から新しいレシピを探してこなきゃ」  
この国の女王の仕事のひとつに、献立作りがある。調理室にある材料を調べて、それらを効率的に使って数日間分の料理を決めていくお仕事。限られた材料の中で考えるのって結構頭使うわ。

「ねえレーヘン、料理ひとつくらい覚えてみない？」

毎日のご飯はほとんどが材料から作っているのだけっこう大変。

今もシメオンとサヴァが乾燥が終った大豆を加工しに行っているし、ライナが籠の中から野菜と果物を取り出して台の上へ並べて、加工するものとそのまま食べれそうなものに分けている。

街で暮らしていた頃はある程度まで加工された物も手に入ったり、疲れたときは総菜屋で買えたりもできたけれど、ここでそれなりに美味しい物を食べようとすると自分達で用意するしかない。

お城に元から貯蔵されていたり、全自動で作られて加工してくれている食材もあるのだけれど、自分たちの食べたい料理となると、それだけじゃ足りない。

緑閑国の料理も作るようになって必要な調味料が増えたので、精霊達も交えみんな総出でお城の設備を動かす事もあったわ…

毎日の献立は私とライナとシメオンで作っている。

ちなみに調理担当にサヴァがいないのは、彼は男の料理というか、恐ろしく簡単なものしか作れない。騎士をやっていた頃はライナとシメオンが家事を全部やっていたらしいわ。

精霊達は調理室で私たちと一緒にいる事が多いけれど、まず見て

るだけだし、進んで手伝いもしようとしてこない。今も献立を決めていた私をレーヘンはいつもの涼やかな顔をして眺めているだけだった。

「料理ですか？ それって人間用の食事製作のことですよね」

「そうよ。アナタが時々手伝ってくれている食事製作よ。アナタがベウオルクトが一品でも料理を覚えてくれると、私、とおっても嬉しいのだけど」

「ファムさまが喜ぶのでしたら、挑戦してみましよう」

私の言葉に、レーヘンが真面目な顔で宣言してくれた。

そうと決まれば、気まぐれな精霊がその気になっているうちに早速実行よ！

「なにが良いかしら？ ライナ、何か良い案ない？」

私の隣で今晚のスープに使う野菜を選んでいたライナに尋ねてみた。彼女は12歳ながらひとりの料理を作るので、とても助かっている。サヴァが食生活に頓着しないので、自分で作るしかなかったらしい。彼女の体調が良くない時はシメオンが家事をしていたので、彼も料理が得意になったのだそうよ。本当にすっかりした子供達だわ。

「パンケーキなんてどうですか？ シメオンも料理覚え始めの時によく作ってくれたんです」

「そうね、あれなら材料を混ぜて焼くだけだからそう難しくないわね」

「おやつになるし、パン代わりに料理と一緒に食べる事もできるわ！私、準備しますね！」

そう言ってライナが食料室へ行った。

金属製のボウルの中にふるいにかけてキメを整えた小麦粉と、塩



と砂糖とふくらし粉と、出来たばかりの豆乳を入れて混ぜあわせる。少しの間涼しい所にボウルを置いて材料を馴染ませて、生地地完成。

「いい、レーヘン。私の手元の動きと、生地の様子をよく見ておいてね」

「はい」

私はスープをよそう時に使っているレードルで生地をすくい、暖めて油をひいたフライパンに流し落とす。生地が広がった頃にフライパンを持ち上げて濡れ布巾の上に数秒置く。

「こつやって、フライパンの温度を一度下げるのがふつくら焼き上げるための秘訣なのよ」

フライパンを加熱台の上に戻して、表面が乾いて来たら木べらでさつとひっくり返す。小麦色に焼けたら、お皿に移して、一枚完成！

「さあ、やってみて」

私の動きをじっと見ていたレーヘンは、うなずいてレードルを受け取った。

「わかりました」

銀髪の綺麗な顔をした精霊はいたって真面目な顔で散々な結果を作り出して行った。

1回目、油をひくのを忘れて、生地がフライパンにこびりつく

2回目、弱火でゆつつつくり焼いて、中まで熱が通らなかった。

3回目、しっかり焼いて、表面が真っ黒に。

4回目、また生焼け

5回目、生地が無くなったので追加。粉を間違える。しかたないので刻んだ野菜を入れて焼いて夕飯の主菜にしたわ。

そして6回目に入。

ちなみにレーヘンの特訓中、隣ではライナが桃のシロップ煮と野

菜の酢漬けを完成させて瓶に詰め終わっていたわ…

さすがの失敗続きで投げ出すかと思ったのだけど、500年間人探しをしていた精霊には忍耐力があった。

嫌な顔せず粉だらけになりながら一生懸命に黙々と私の特訓に耐えて、手を動かして、失敗する。

なんだかんだと失敗続きで10回目になった頃、レーヘンがちょっと疲れた顔つきで私の方を向いた。

「ファムさま」

「なに？」

「別の方法を使ってもいいですか？」

「？ 何かあるの？ いいわよ。ちゃんと私が食べられる物を作ってね」

レーヘンは私の返事を得ると加熱台の下の戸棚から取っ手のついた真つ黒な箱を引つ張り出してきた。それを調理台の上に置き、隅のボタンを押すと箱は本のように開く

「な、なにこれ」

凹凸のある箱の中にレーヘンは生地を流し込み、元の通りに閉めてまた違うボタンを押した。

しばらくすると良い香りがしてきて、何かを知らせる音が箱から聞こえてくると、レーヘンが箱を開く。

「できました！」

嬉しそうにしている精霊の横から覗き込むと、格子状の凹凸の形をした生地が小麦色に焼き上がっていた。

手のひら大のできたてのそれをひとつ手に取って、かじってみる。  
「どうですか？」

「おいしいけど…」

「ワッフルというんです」

私が教えようとしていたパンケーキはどうなったのよ。

なんだか腹が立ったので、ワッフルと一緒に食べるための泡立て

たクリームやシロップを作らせようとしたらまたレーヘンは失敗して、今度はソフトクリームというのを作った。

アイスクリームよりも柔らかくって、すっごく美味しかったわ。でもやっぱり、なんだか腹が立ったので、今でも時々レーヘンにパンケーキ焼きの特訓をさせている。

銀と灰（第三章「海賊と情報 2」読了推奨）（前書き）

銀色と灰色の雑談です。

第三章の「海賊と情報 2」の直後です。

くろやみ国の城で最も高い場所は細く長く建ち上がる塔だ。

現在はもうほとんど使われることのない通信用のもので、中にはおろか外側にもろくな足場が存在せず、人間が立ち入ることはできない。

元々人が目にすることができないものをやり取りするためのそれは、普段ほとんど暗い灰色の雲に隠れている。

けれど、今夜は上空に風がでていて珍しく雲が薄くなっており、精霊の視覚だと塔の先からは城や国の荒れ果てた大地や、遠く海の水平線までが雲の隙間から見ることもできた。

レーヘンは気象の観測と、警備する意味も含めて、計測機器を持つて塔の先端に立ち、その生気の薄い景色をじっと見つめていた。

城の人間たちは寝静まり、女王もようやく先ほど寝付いたところだ。

彼女が泣いているのには気がついていたけれど、浴室には侵入してはならないと厳命されているので、レーヘンは何もすることができなかった。

ベウォルクトには、そういう時は何もせずそっとしておくものだ

と言われたが、その意味するところがまだうまく理解できず、レーヘンの内でモヤモヤとしたものとなって重たい霧のように漂っていた。

「いい場所だね。国が見渡せるし、海も見える。そして孤独になれる」

声が聞こえたのはすぐ足下からだった。

「おや、コトヒトさん。今日はよく会いますね」

ほとんど柱しかない状態の塔の、レーヘンが立つ先端から一段下の突き出した部分に、いつの間にか黒堤組という海賊に所属する闇の精霊、コトヒトが腰掛けており、レーヘンに向かって話しかけてきていた。

「本当だねレーヘン。奇遇だ」

コトヒトはそう言い、穏やかに微笑んだ。細く長く編まれた灰色の髪と墨色の衣が風に煽られてはためいているが、特に邪魔にする様子なく話している。かくいうレーヘンも、風に煽られる銀髪や衣服を気にする様子なく会話を続けている。

一応城の一部だが、内部ではないので、レーヘンはくろやみ国の精霊ではないコトヒトがここにいることに言及しないことにした。

国外の一等級以上、それも闇の精霊と会話する機会はあるものではない。

「黒堤組のみなさんはどうしてます？ 食べ物に口に合いましたか？」

女王がこの国に来た当初、食べ物に関してが一番不平不満が多かったのを思い出し、レーヘンは尋ねてみた。

「肉がない、味が薄いと文句を言っていたが皆すっかり食べ尽くしていたよ。まあ、今回は前代の組頭の送別式の為に来ていたから、それなりに食料や酒なんかも持ってきていたし、賑やかにやってい

たさ。今は歩哨を残して、あとは寝ているよ。組頭はシシが実体化して傍についている」

「シシは面白いですね。純粹で、無知で、熱心だ。あれは主以外にはなつきませんか？」

「許可があれば少しはなつくよ。仲良くしたいのかい？」

「いえ。ただ、うちの女王が触りたがっていたんですよ。ふさふさした毛並みが気持よさそうだと」

「ワタシが手入れしているからね。歴代の組頭はたいていシシを昼寝の枕に使っているよ」

その話を聞いて羨ましがる女王の姿がありありと浮かび、レーヘンは思わず微笑んだ。

「あなたはどうしてこの国を去って、あのような姿になったのですか？」

精霊、特に一等級や特級になると、己の姿にもこだわりが出る。初めは違和感があったが、レーヘンも今の姿が気に入っているし、ベウォルクトにいたってはずっと同じ姿を守り続けている。それを生き物の形態ですらなく、人間の道具にするというのは、精霊にとってまともな発想とは言えなかった。

「国を去る人々が気になったんだ。それでずっと付き添って、その先を見てみようと思った。なにより滅び行く国を見ているのが辛かった」

コトヒトは遠くを見上げるように視線を逸らし、言った。

「けれど特に何かしたい事もなかったし、国を出ても人々は争いや揉め事ばかり起こしていた。そのまま精霊としての生をやめて消滅してもよかったんだけれど、シシがまだ安定しない頃でね。そばにいないと自己崩壊しそうだったから、シシと同じ形でいることにしたんだ」

レーヘンは自分が同じような立場になるのを想像してみた。けれ

ど、未だかつて消えたいと思ったことはないが、ある存在が気になつて、ずつとついていこうとする事には共感できた。

「しばらく経つて、そう、300年くらい前かな、傍観するのにも飽きたから、ときどき体を動かすようになったんだ。きつと君の影響だ」

コトヒトはレーヘンに目線を戻した。

「ワタシですか？」

レーヘンはちよつと驚いて、瞬きをした。

「眠っていた状態でも、遠いどこかの土地で君がこの国の王を探して奮闘している事を感じていた。やり方はちよつとどうかと思うくらゐまどろっこしかったけど、何もしなかったワタシよりずっとましだった。おかげで、また活動しようという気になれたよ」

「それはどうも、光栄ですね。あの事は本当に手探りでしたから」

「ベウオルクトは変わったね」

しばらく言葉が絶え、時間をおいてコトヒトが口を開いた。

「前はあんな感じじゃなかった」

「ずいぶん元気になってきましたよ。王の間を破壊された時なんて、激怒していましたし」

「たしかに、あんな大穴あけられると怒りもするだろうよ。凄いな、一体どうしたのやら」

そういえば、彼らの時代にコトヒトはいたのだろうか。あの二人と会わせればコトヒトは過去を懐かしみ、喜ぶのだろうか。

レーヘンはふとそんなことが気になったが、つい先ほど行なわれた国の会議で危険過ぎる彼らのことは外部に対して機密事項になったので、特に口にしないでおくことにした。

「この国も賑やかになってきているんですよ」

「楽しそうだね。もう居られなくなったワタシは、ちよつと寂しいな」



つま先をぶらつかせてそうコトヒトは言った。

「あの海賊がアナタごと婿入りでもすれば戻ってこれますよ。ありえない話ですがね」

「難しいのかい？」

レーヘンはしゃがみ、髪を掻き上げて苦笑した。

「ファムさまには未だ忘れられない男がいるんです。腹立たしいことです」

「おや、精霊が嫉妬とは、珍しいことだ」

コトヒトは目を見開いた後、吹き出すようにして笑った。

「嫉妬かどうかは、ただ、ワタシは我が主が健やかに、幸せでいてほしいだけです」

レーヘンは首をかしげて、微笑んだ。

うーん、なんだか昨日は変な夢を見たわ

「どうしましたか、ファムさま。どこか体調不良でもありますか？」

「ううん、大丈夫よベウォルクト、ただ夢を見たの。ぼんやりとして覚えてないんだけど、レーヘンとコトヒトが城の高い場所で仲良くお喋りしているの。コトヒトがどうして国を離れたとか、そういう話を話していた気がするわ」

「おそらくそれは実際の事です。きっと睡眠中に意識が城と混ざったのでしょう」

『今日の天気はいつもと同じ曇りです』と同じ調子で、ベウォル

クトは言う。

「・・・それって大丈夫なの、私」

「王の間が修理中ですのでファムさまと城とのつながりが不安定なのかもしれません。意識がこうして戻っているのですから、問題はありませんが、ファムさまが休息できないのでしたら話は別です」

私は伸びをした。体がこわばって、重苦しい。

「言われてみれば、あまり寝た気はしないわね」

「それはよくありませんね。少々調整しておきます」

「お願いするわ」

それにしても、精霊って変な場所でお喋りするのね。

## 銀と灰（第三章「海賊と情報 2」読了推奨）（後書き）

雑談を書いてみたのですが、長くなった上に本編にあまり関係ない内容なので、番外編に分けました。

微妙にレーヘンが成長している気がしないでもない。

くろの騎士の脱出劇・決勝・(第三章「くろの騎士と闘技場 5」の続き)(前

第三章 くろの騎士と闘技場 5の続きです。

ここからはサヴァ兄さんメインなので番外編扱いです。

闘技場の中心ではいよいよ協闘大会の決勝が行われていた。

観客達が固唾をのんで見守る中心で二者は闘う。殺し合うためでも、損ない合うためでもなく、各々の実力を比べあうかのようなそれにサヴァは久方ぶりの感覚を覚えた。お互いの技を手加減する事無くぶつけ合い、避ける事も逃げる事もしない。一撃一撃に気力がみなぎっている。

「楽しんでるな。顔が見えなくてもわかる。俺も最高に楽しい」

紅濫將軍がそう言い、身体に対して小さい剣を振る。素早い踏み込みに対してサヴァは槍の柄で応じ、將軍の大きな身体に合わないその剣は二撃打ち合うだけで持ち手から折れた。「俺の剣が！」闘技場の入場門の方から男の悲痛な叫び声があがる。

「良い槍だな」

使い物にならなくなった剣を捨て、紅濫將軍は紅の髪を振り乱しながら数歩引くと、口元に笑みを浮かべて言う。

「紅濫將軍！ お待たせしました」

「おおよ！」

入場門から先ほどとは別の赤麗の軍服を来た男が叫び、長い柄がついた斧を投げ入れる。それを拾い上げた將軍が振り上げると深紅の刃が太陽光を受けざりと輝いた。柄の長さはサヴァの槍ほどもありそうだった。遠目から見ただけでも細かな装飾があり、実戦用よりも儀礼用のものに思われた。

「場内だとコイツに仕込まれた術は封じられちまうが、一応手持ちの武器では一番頑丈だ」

そう言つて振りかぶつて来た斧を槍で受けると、今までの物とは比べ物にならないくらい重い衝撃がきた。さすがのくろやみ国の槍も震動で震え、サヴァは柄を強く握り直した。

「急ぎ用意させたがまあマシだな、本当はもつと俺に馴染んだ物で相手したかつたんだが」

將軍は話しながら感触を確かめるように軽い動きで振り下ろす。受け止めるサヴァは衝撃に耐えるが、受けた刃を押し返す余裕は無い。

「ここにくる前にやたら強い銀髪とやりあつちまつて俺の得物のいくつかはぶつ壊れちまつた。お前アイツらの事知らないか？ 微妙に似た気配を感じるんだが」

「……」

サヴァは何も聞か無かつた事にして、無言のままに構え直した。

「エシル、先ほど竜槍とどのような話をしたのですか？」

大空騎士団団長のエシルは傍らに立つユリアを見た。彼女は決勝が始まつてから闘技場の様子から目を離す事が無い。

「気になりますか？」

きつく握り込まれた彼女の手を見て深い青紫色の瞳を細めると、エシルは先ほどの様子を彼女に語り出した。

飲み物を買うために廊下を歩いていたエシルは、出場者控え室に戻ろうとする“くろの騎士”を見かけると迷う事無く近寄り、

「青嶺国を旅だつて行方不明と聞いていたが、無事だったか」

そついきなり声をかけた。相手が行方不明者だろうが正体を隠しているのが気にせず、ユリアが気にしている男に対して、迷いも遠慮もなく話しかける。相手の顔は黒い兜で覆われて表情は見えないが、拒絶する事無く答えてきた。

「ああ。あの時の事には感謝している。あなた達のお陰でもめる事無く旅立つ事ができた」

周囲に人がいて、かつ聞き耳をたてられている事を感じたので、二人はどちらとも無く連れ立ってひと気の少ない場所へと移動した。「今までどこに？」

エシルが知っているのは彼が青嶺国へ妹と共に亡命したところまで。大空騎士団としてはその後の支援もしていたが、彼自身は緑閑国で起きた問題の処理にた携わっていたため、気がつけばかつて緑閑国騎士団が誇っていた竜槍と呼ばれた騎士は行方不明になっていた。

「妹を治療出来る国があると聞き旅に出て、今もそこで」

「緑閑国の騎士職を捨て、大空騎士団からの誘いも蹴ってか。騎士の誇りよりも妹が大事という訳か」

「ああ」

“くろの騎士”はしっかりとうなずいた。

「騎士の資格はこの世でたった一人になってまで守るものではない」「わりきつてるな」

多くの騎士は騎士である己に誇りを持ち、それを軸として生きている者も多い。だがエシルは彼の言葉に同意を覚えた。自身においても、全てを差し置いてでも守り通したいものは別にある。

「だがなぜまた騎士になった？　しかもそんな格好で」

「守りたいものができたからだ。それを守るために俺のこの身体が役に立つのなら、いくらでも使う。この鎧はその為のものだ」

ジェスルが運営室に戻ると、団長のエシルが試合を見ながら各部署からの報告を聞いている最中だった。

「現在街の周囲がまた別の結界で囲まれているようです」

一人の衛士の報告に対して、エシルは一人納得するようにうなずく。

「ヴィルヘルムスの仕掛けを彼の部下が発動させたようだね。元々この闘技場の結界自体彼が作ってくれたものだし、例の探しものの関係だろう。外の事だからあまり気にしないでいい。今の我々は全力をあげて闘技場内の秩序を守る事が重要だ」

その様子を眺めていたジェスルは、ふと違和感に気付いた。いつも彼の傍らに立つ存在がいない。

「おい、副団長はどうした」

「ちよつとでかけていますよ」

振りかえったエシルの浮かべる笑みは陽光のように輝くものだった。その「外向け」の笑みに、ジェスルは軽く恐怖を覚えた。

「おい、何があつたんだ。もしかしてでかけたつてのは“くろの騎士”の元へか」

「ええ」

「副団長が男を気にして動くのをあえて許すのか？」

「断腸の思いですよ。軽く内臓が煮えくり返っています。ですがこればかりは仕方ありません。彼女のたつてのお願いですから」

そう言つてさらに微笑むエシルに、ジェスルは鳥肌をたてた。

「まさか『湖畔の剣人』を出したのか？」



紅濫將軍の乱雑な深紅の髪は赤麗国軍の不思議の一つとされている。目元がすっかり隠れているのに鬨に支障を感じている様子は無いし、あれで視力も良いと聞く。どの様な理由でああいった髪なのか、サヴァには想像もつかない。だがあれで相手に目線から次の動きを読まれないようにしているのかもしれない。そういった事を考えていると、鎧の通信装置が立ち上がる音が聴こえた。

『こちらくろやみ国内に戻りました。そちらもいつでも撤収してください』

通信装置から聴こえて来た闇の精霊からの声に、サヴァの意識はくろやみ国の国民に戻った。その変化に紅濫將軍はめざとく反応した。深紅の髪の隙間から覗く目元からは笑みが消える。

「そろそろ勝敗をつけるか！ “くろの騎士”よ」

「ああ」

その瞬間、“くろの騎士”は將軍からの斧の一撃を右肩と右腕全体で受け止め、衝撃を下半身のバネを使って受け流し、同時に將軍の足へ向け槍を投げて突き差す。將軍が槍を避ける隙にサヴァは斧を抱き込んだまま体を大きく倒して足を上方へ伸ばすと、將軍の首元を足で捕らえてそのまま地面へありつた力の力で叩き付けた。

国、とりわけ軍に所属する者は定められた武器を使った戦い方が身体に染み付いている。そのため、武器を手放して全身を使う闘いや、足技などにはとっさに対応出来ない。

サヴァはそれをくろやみ国で凶暴で元軍属の影霊達から身を持って教わった。

「あー楽しんだ。これだけ純粹に楽しいのはどれだけぶりか」

紅濫將軍は気絶はしなかったが起き上がる事なく、ひびの入った地面に寝転んだまま言う。

見逃してくれるつもりらしい。

「おい、竜槍。次にどこかで会うときはもう国の騎士同士だろう。」

殺し合う事にもなるかもしれんが、また会つ日を楽しみにさせてもらう。気合いを入れて帰れ」

「感謝する」

サヴァは將軍の足元から槍を抜くと審判達や衛士の声を無視して観客席に飛び込んだ。闘技場には天井がなく青空が見えていたが、法術による結界が張り巡らされていることは聞かされていた上に、鎧を着ているせいなのか、空を覆う金色の糸のようなものが薄く見えた。

「出口には行かないのか！ どこに行こうっていうんだ」

紅濫將軍を打ち倒した後、“くろの騎士”が速攻で観客席に飛び込むのを見て、ジェスルは待機させていた衛士と共に追った。走りながらようやく指示を出せるようになった大空騎士団員にも声をかけて集めて行く。

熱狂する観客をすり抜け、飛び越え、“くろの騎士”は最上部へ駆け上がる。

観客席が途絶え、場壁にあたると一瞬空を眺め、それから壁を蹴って飛び上がる。

そして空中の「なにか」を両の腕に絡め、掴むような仕草をすると、その手を後方へ振り抜いた。空気が振動し、一瞬空の色が白く染まる。

「あ、あいつ、結界を素手ではぎ取りやがった！！」

ジェスルはあまりの出来事に思わず叫んだ。

“くろの騎士”が鋭い口笛のような音を発すると、黒い影が闘技場上空に飛び込み、落下中の“くろの騎士”へと勢いよく向かう。

「おお、竜か」

上体だけ起き上がった紅濫將軍がそれを見上げ、言う。

黒い身体の竜は“くろの騎士”を受け止めると、一気に羽ばたいて街の外へと向かって高速で飛んで行った。

「竜って…まじかよ！ どこにいたんだよ！ あーとにかく！ 追うぞ！ 街の包囲隊、黒い竜が行くから追え！」

ジェスルは半分やけになりながら通信術の仕掛けられた腕輪に向かって指示を出した。

くろの騎士の脱出劇 - 決勝 - (第三章「くろの騎士と闘技場 5」の続き)(後

くろの騎士の脱出劇 - 湖畔の剣人 - へと続きます。

くろの騎士の脱出劇 - 湖畔の剣人 - ( - 決勝 - の続き ) (前書き)

第三章 くろの騎士と闘技場 5の続きの

くろの騎士の脱出劇 - 決勝 -  
の続きです。

くろの騎士の脱出劇・湖畔の剣人 - ( - 決勝 - の続き)

「エシル、お願いがあるのですが」

揺れる視線と共にぎこちなく言葉を紡ぐユリアに対し、エシルはいつも彼女に対してするようににっこりと微笑む。

「君のお願いなら何でも叶えるよ、ユリア」

「『湖畔』を出してくれませんか」

黒い姿のゲオルギに乗り、サヴァが闘技場から目一杯の速さで飛んでいると、街外れの草原にさしかかったあたりで結界に阻まれた。先程の闘技場にあった系のような結界とは違い、ぼんやりと光る水の薄い膜のようなもので、力づくでなんとかできそうなものではなかった。仕方がないので一旦地上に降り立つ。

『このまま一気に逃げないの？』と不思議そうにゲオルギが首を傾<sup>かし</sup>げる。

「どうも俺たちを見逃してくれないようなでな」

そう言ってゲオルギの首筋をなでて労ると、草原に立つ人物の方を向く。

そこに佇むのは大空騎士団の上着を肩に羽織った女性だった。

「お待ちしておりました」

銀縁の眼鏡をかけ、肩を越える長さの緑と青の中間の色の髪を風に遊ばせながら微笑む。だがその優しげにもとれる笑みとは裏腹に、まとう雰囲気は薄い氷が張ったように緊張したもので、異様な取り合わせに相手の意図が読めなかった。そして女性の手に持つものを見て、サヴァは鎧の背に装着していた槍を手に持った。

（“刀”か…）

騎士の剣はたいていは拳の幅ほどのまっすぐなものが多いが、この刀という種類の武器は、片刃で三日月のようにゆったりと反った形状をしており、細身にもかかわらず恐ろしいほどの強度と切り裂く力がある。そして製造が難しいこともあり、大陸ではめったに遭遇することのないものだった。

サヴァはかつて育った地方で馴染みのあったそれを思い出し、ゲオルギをかばうように前に出て槍を構えた。鎧の探知機能では周囲五？圏内に目の前の女性の他には誰もいないようだった。

「この一帯は頼んで人払いをしてもらっています」

女性はそう言つと眼鏡を外して肩にかけていた上着の右胸のポケットに入ると、それらを草原の上に放り投げ、淡い水色のブラウスと制服のパンツだけになる。

そして右手に持った刀の鞘から涼し気な光を放つ細身の刀身を抜き出すと、そのまま踏み込んで斬りかかってきた。

「なっ」

想像していた以上の速さで来られて、サヴァは思わず槍と左腕で防御した。

「お相手願います。私と勝負して逃走できたならこの先の動向には目を瞑りましょう」

彼女の表情は恍惚としており、青白かった頬には色があり、澄ん

だ湖のように透明感のある水色の瞳はとろりとうるんでいる。

「さあ、闘いましょう、竜槍のサヴァ。私は貴方にずっと憧れていたんですよ」

大空騎士団団長のエシルは約束した人払いの範囲のぎりぎり外にあたる見晴らしの良い丘の上に立ち、“遠視<sup>えんし</sup>”の術で二人の闘いを眺めていた。草原を駆け抜ける風がきつちりと整えられていた彼の淡い紫色の髪を柔らかくほぐし、普段以上に感情の見えない顔に陰影をつけていた。

大会の終結とともに大空騎士団のうち各国所属部隊の指揮権はリエスル王子などそれぞれの部隊長の元に戻っていたのだが、エシルは先ほど大会の後片付けという名のもとに、強制的に大空騎士と衛士全員を団長の指揮下に置き、ユリアが闘いに集中できるように務めていた。

あえて間違った方向に人員を散開させるが規律上は何の問題もない。リエスル王子が文句を言う以外は。

「おまえらはまともに仕事する気あるのか！」

「仕事はしていますよ。しかし仕事以上に騎士として生きているのです。特にユリアは」

エシルはリエスルに返事をしつつも、深みのある紫の瞳は微動だにせず草原の様子を“視”続ける。

彼はユリアの持つ氷のような刃がきらめくたびに胸の内が疼くのを感じ、それを間近で見ているであろうサヴァに対しての嫉妬を感じ、そして自分の心から沸き起こってくるそれら二つの感情を味わ



っていた。

「普段はあんなに大人しいのにな。副団長がああいう人物だと知っている奴なんて騎士団にもほとんどいないだろ」

「ええ。ユリアは奥ゆかしい人ですから、すすんで公言するつもりはないようです」

かつて顔を真赤にして黙っていたと言われたときのユリアの様子を思い出し、エシルは顔をほころばせた。

「ここだけの話ですが、私は彼女のそばにいるために騎士になったのですよ」

「見て薄々わかっていたが、マジか。そんな動機でよく団長まで登りつめたな」

“くろの騎士” 捕獲を諦めたのか、ジェスルは待機している法術師に追跡と探査の構築を指示すると、近くにあった岩に腰掛けて白箔王の依頼に対する報告書の作成に入っていた。

「ジェスルは“視” ないのですか？」

「おまえに殺されたくないから、副団長の素顔は見たくない」

「確かに剣を持っている彼女はとても美しく、あの姿を他の男が見るなどと」

ジェスルは今回の件で“くろの騎士” が確実にエシルの死の芳名帳に載ったことを知った。

先程の紅濫將軍との闘いとは比べものにならないくらい、サヴァは苦戦していた。

くろやみ国でマルハレータと模擬戦をした時もそうだったが、サヴァは自分はどうにも女性と闘うことが苦手だと実感していた。

病弱な妹と一緒に暮らしてきて、病で寝込み、倒れ、転び、怪我をする姿にいつも心配させられて来たせいか、女性の身体の弱さに恐怖すら覚えている。

それに対して、くろやみ国でマルハレータは意識を変えろと言い、何度も暴力的に殴りかかってきたが、苦手意識を乗り越える前にローデヴェイクが現れ、マルハレータがサヴァと模擬戦をしようとする度にローデヴェイクが本気で殴りかかってきて結局それどころではなくなってしまった。

その苦手意識の上に、今闘っている女性はかなり剣の使い手で、高速で鋭く斬り込んでくる。何度か読み誤って剣戟を受けたが、そのたびに鎧に亀裂が増えていく。腕もそうだが、扱う刀も恐ろしく切れ味が良い。

「撃ち返してください。そうしないと、この『湖畔』の障壁は破壊できませんよ」

微笑みを崩さないまま、女性は言う。

「『湖畔』……まさか『湖畔の剣人』か？ 三剣勇の」

『紅濫の烈士』、『紫塔の騎士』、『湖畔の剣人』は大陸の騎士

なら一度は耳にしたことがある剣の使い手達だ。他にも数名いるがよく名が挙がる三名をまとめていつしか三剣勇と呼ぶようになった。前者二名は顔も本名も有名だが、『湖畔の剣人』は人前にほとんど出てこず、山奥で修行している剣士のことだと言われていたが……

「剣でしたらそうなりますね。ですがそこに槍も含まれるのですから貴方だって有名なのですよ？ 『緑閑の竜槍』」

サヴァは下から斬り上げてきた一撃を槍で受け、一瞬の溜めを入れると一気に振り払う。

「あれは俺をからかう名前だったんだがな」

竜のような外見で竜に乗り、剣が苦手な槍しか取り柄のない騎士。それがいつしか通り名になり国外にも通じるものになっていった。緑閑国でのサヴァは騎士仲間からは認められていたが、騎士団の

上層部からも一般市民からもあまり好意的には見られていなかった。故郷が滅んで妹以外の身寄りが存在しない上に、竜肌のような模様と左目という奇異な外見。

実力主義の騎士団の中ではそれなりの地位にいられたが、常に周りに認められるために過酷な仕事を多く引き受け、家に帰る事も少なくいつも妹に寂しい思いをさせていた。拳句の果てに妹が攫われてもすぐに動くことが出来なかった。

「俺は俺だ。もう緑閑国の人間ではないし、そのうちまた別の名前がつくだろう」

「今度は別の国の騎士として？」

『湖畔の剣人』はサヴァの槍を刀の背の部分で受けると顔を寄せ、鎧の奥、黒い仮面の下でサヴァと視線を交わしながらささやいた。

「貴方はこれからも戦うのですか？」

サヴァは彼女の瞳から目を逸らすことなく答える。

「ああ。俺は戦う。守るものの為に」

自分を受け入れ、妹のライナの命を救い、追放されたシメオンを受け入れ、竜のゲオルギと共に静かに暮らす事が許される国を。

「そうですか。では次に会う時は……」

『湖畔の剣人』は寂しそうに顔を曇らせ、力をゆるめて刀を引く。

「女性への耐性をあげておいてください！」

そして再び刀に一気に殺気をこめて斬り込み、サヴァが避けたところをまた畳みかけて斬りかかってくる。

「こんな状態だとともに闘えないじゃないですか！ 守るものも守れませんよ、サヴァ！」

「あ、ああ」

いきなりの勢いに圧倒されて、数撃受けて、もう本当に鎧の耐久具合が危なくなってきたのでサヴァは逃げに転じた。

刀に追われながら周囲を探ると、行く手を阻まれた水の薄い膜のような結界は消えて、騎士と衛士の集団に遠巻きに包囲されつつあ

った。

ゲオルギが様子に気付いて駆け足で近づいて来たところに飛び乗ると、一気に飛び上がらせる。

「じ、助言に感謝する。それでは！」

「感謝じゃなくて、もっと強くなってくださいと言っているのです！」

遠ざかる中で『湖畔の剣人』からの叫びが聞こえてきた。

「っ、疲れた……」

ゲオルギの背の上でがつくりと頭を垂れ、サヴァは思わずそうつぶやく。また女性への苦手意識が強くなった気がした。

ちなみにこの一件のおかげで後にエシルに本気の殺意で突っかわられる事になるとは、この時のサヴァはまったく予想していなかった。

くろの騎士の脱出劇・湖畔の剣人・（・決勝・の続き）（後書き）

兄さんの女難

「くろやみ国と準備 1」でぐったりしていたのはこういった事があつたからなのです。

## ある少年の物語（前書き）

第二章「無いものと有るもの 4」読了推奨

（さらに第三章のくろの騎士シリーズまで読了していると登場人物が分かりやすいです）

本編の中ではすでに終わっていた、シメオン少年が登場するまでに至った諸々の騒動の話です。

通常の二話分くらいの長さがあります。

ファムさんも精霊もほぼ関わってこないの代わりにシリアスです。でも第一章や第三章や出てきた人物も少しだけでてきます。要するに、本編の補足的なものです。

## ある少年の物語

僕がライナが行方不明だと知ったのは彼女がいなくなってから三日も経ってからだった。いつものように寄宿校からライナとサヴァ兄ちゃんの住む家に行こうとしたら、先生に引き止められて、教えられた。

「どうして黙っていたんですか」

「言えばこうして探しに行こうとするからだ。今は騎士団にいるあの子の兄が探している」

「サヴァ兄ちゃんはいつも騎士団の仕事が忙しくて中々家に帰れてはいけません。なのに動いてるってことはライナが本当に危ないからじゃないんですか」

僕は縄で縛られて教員室に転がされながら、先生を見上げた。

「大丈夫だ。彼女はきっと見つかる。だから君は学院に入ることに集中するんだ。いいね。しばらくそこで自分を落ち着けなさい」

先生はそう言う僕を残して教員室の鍵を閉め、どこかへ行ってしまった。

僕は目を閉じて深呼吸をする。

震えそうになる身体を出来る限り落ち着かせて、薄級の精霊を呼び出し“探知”と“遠耳”の精霊術を発動させる。

校舎内で教師が集まっている部屋を探した。さらに集中して、耳をすませると、声が聞こえてきた。

「おお、戻ってきたか。どうだったシメオン君は」

「あの子があんなに錯乱するなんて初めてだ。いやはや、一晩で落ち着いてくれるといいんだが」

「あの青嶺国の学院に入れそうな一番の有望株だからな。このまま頑張ってもらいたいものだ」

「いなくなったのはあの変な病を抱えた子でしょう？　きっと例の団体に目を付けられたんじゃない？　可愛そうにねえ」

「どうも兄も行方不明になっちまったらしいぞ」

「あの騎士の兄さんがか。仲の良い兄妹だったんだがなあ。うちの生徒はまだ被害がでてないんだろ？　早く騎士団が捕まえてくれると願うしか無いな」

もう役に立ちそうな情報はないな。

精霊術を切ると縄をほどいて扉の施錠の法術を解いて出た。そのままサヴァ兄ちゃんが働いている騎士団駐在所に向かう。

何人か知っている顔の騎士の人たちがいて、その中心にうずくまるようにして座るサヴァ兄ちゃんがいた。

「兄ちゃん！！」

いつもは厚着をして肌を隠しているのに、薄着で、土と傷だらけになっていた。

そして、その腕の中には塵まみれの毛布にくるまれたライナがいた。

「ライナ！」

人ごみをかき分けて必死に触れた。ライナの力なく垂れた手は水のように冷たかった。

「シメオンか。学校はどうした」

「もう放課後だよ！　ライナと兄ちゃんが行方不明ってきいて来たんだ」

「大丈夫だ。無事だ」

ライナの顔は青白い。意識もない。

「ライナはどうしたの？　ねえサヴァ兄ちゃん、ライナはどうして起きないの！」

「落ちて着けシメオン。ライナには治療が必要だ。俺達は今から青



嶺国へ行く。あちらの方が医療も進んでいるから絶対に治る。だからおまえは勉強に集中するんだ。いいな」

僕は返事をしたのだろうか。めったに見ない兄ちゃんの必死な顔つきと、目を覚まさないライナの姿が頭の中でぐるぐるまわって、気がついたら兄ちゃんたちはいなくなっていた。

「竜槍め、潜入作戦とは危険なことをする。あとでうちが睨まれたらどうするんだ」

「あそこに関してはもう国も放置状態だからな」

ぼうつとしていたらふと冷たかったライナの手を思い出して、震えが止まらなくなってきた。しばらく経って落ち着いてきて兄ちゃんたちを追おうとしたら、騎士団の人たちに止められた。

「先ほど国全土に緊急警報がでた。しばらく国外に出ることは禁止だ」

ライナを助けるために兄ちゃんと仲間の騎士達が秘密組織に潜入して、犯罪の証拠を見つけることができた。けど上からの圧力がかかって逮捕できないので、騎士団はしかたなく国境を封鎖することで逃げ道を塞ぐ手段に出たらしい。兄ちゃんと同僚の騎士の人がそう教えてくれた。

サヴァ兄ちゃんはそうなる直前に検問を突破して、最後は騎竜のゲオルギに乗って強引に国境を越えたらしい。

「あいつは剣を返したらしい。あれだけの腕があつたつてのに、惜しいな」

騎士が剣を返す。つまりは騎士を辞めるということ。

「青嶺国の大空騎士団の知り合いを頼つたらしいから、悪いことにはならないだろう。お前も学校へ戻れ」

騎士の人に促されて戻ろうとしたけれど、学校の門のあたりから進めなくなってしまった。

地面も街も空もなにかもがぐしゃぐしゃで、何が何だかわから

ない。

気がつくと僕は学校の医務室に運ばれていた。倒れていたのを発見されて運び込まれたらしい。

寝台に寝かされて、眠れないけれど起き上がることもできない。

することがなくて、僕は眼を閉じてライナのことを考える。

ライナが居なくなる前、最後に会った時にした会話はなんだったか。確か僕はまた小言を言われていたんだっけ。

「シメオン！ 大丈夫なの？ また勉強に夢中でご飯食べてないでしょ。今度忘れたら十日間ピーマンだからね。前みたいにゲオルギの所に持つて行ったら、三倍の量なんだからね！」

君の方が大丈夫じゃないじゃないか。

また体調を崩しているのに、僕の事心配してばかりで！

「兄さんは丈夫だから放っておいても平気だけど、シメオンは心配になるから」

君の身体、治療法が無いんだよ？

「あと夜食用にマフィン沢山作ったから、持つて帰って寄宿学校で食べてね」

彼女はいつも僕の心配ばかりしていた。

僕は孤児だ。

気がつけばライナとサヴァ兄ちゃんと同じ村にいて、孤児院で暮らしていた。その頃から身体の弱かったライナと年の近い仲間がいなかった僕は他に遊び相手を見つけられなくて、いつも一緒に遊んでいた。

村が襲われた時も一緒だった。

孤児院の先生も仲間たちもライナの家族も、間に合わなくて結局

誰も助けられなかったけれど、僕はライナを守ることができた。そしてライナは僕を守ってくれた。最後まで、僕が血まみれになってもライナはずっと一緒にいてくれた。

村を逃げ出したあとは森の奥の洞窟にずっと二人で隠れていた。サヴァ兄ちゃんが騎士団の人と助けに来てくれるまで、ずっと。

サヴァ兄ちゃんはライナと一緒に僕も引きとってくれた。

兄ちゃんが村に帰省するたびに会っていたし、僕が兄ちゃんを恐れないと知ってよく遊んでくれたから、家族のように思ってくれたのかもしれないし、僕がライナから離れなかったのもあるかもしれない。

村での体験のショックでライナは言葉を話せなくなって、僕は体の感覚と感情を忘れてしまった。

ライナは毎日暗い顔をしていたし、僕は僕でずっとふわふわとした霧の中で生活しているようだった。苦しくはなかったけど、何も感じない不安はあった。けれど、喜怒哀楽を忘れてしまっても、僕はライナの傍にいる事には変わりなかった。

サヴァ兄ちゃんの家のある街に住むようになって半年ほどたって、少しずつ言葉を使えるようになったライナが僕に言った。

「あのね、シメオンが、いつも手を繋いで安心させてくれるから、私、また言葉を使えるように、なっただよ。だから、私がシメオンの心が元気になるまで、ずっと傍にいるから。大丈夫なんだから」  
僕が初めて取り戻したのは、繋いでいたライナの手の柔らかさだった。

ライナの体調は年々酷くなっていった。彼女の身体が消えかける奇病は誰もが原因がわからないといい、どの医者に見せても諦めら

れてしまった。

僕は時々寝込むライナの看病をした。

ライナの消えかけた部分は麻痺したような感覚になるらしい。そして理由もわからず体が消えかけると言う不安と恐怖。時には痛みもあるらしい。

彼女はそれに黙って耐える。唇をかみしめてベッドの上でじっとしている。身体の半分が透けているのを見られて窓の外から石を投げられた時も、欠けた部分を包帯で隠して外に出て奇異の目で見られた時も、ライナはじっと耐えていた。

サヴァ兄ちゃんは騎士団の仕事が忙しくて、月に数える程度しか家に帰ってこない。騎士団の中でも特に危ない仕事が多い部署にいるらしい。

それでもサヴァ兄ちゃんが家にいるとライナは安心して、とても喜ぶ。兄ちゃんもライナが寝込んでいるときはなるべく家に帰ってくるし、ずっと傍にいる。

あの二人の間に僕が入ることは出来ないけれど、二人は僕を受け入れてくれているから、それで満足だった。兄ちゃんがいないと、ライナの笑顔は時々どこか無理をしたものになるから。

ライナを元気づけたくて、もっと笑顔になつて欲しくて、僕は必死になつて笑顔を思い出した。僕が笑うことでライナが笑ってくれて、そして僕は嬉しいという気持ちを取り戻し、涙を流すライナのために怒りと悲しみの気持ちを持てるようになった。

僕はライナの傍でしか泣かなくなった。

どんな目にあつて何を言われても、嬉しくても悲しくても悔しくても、ライナの傍以外では決して涙は出てこない。どうしてもだかは気にならない。ライナの隣にいられるのなら、僕はそれでいい。

ライナは髪を褒めると一番喜んでくれる。

「私この綺麗な髪があるから身体のこと言われても平気。父さんと母さんが褒めてくれた自慢の髪だから」

ライナの自慢は髪だった。腰まである長い髪は綺麗な緑色をしていて、いつもは濃い緑なのに日の光でみるとちよつと黄色がかつて見えたり、月の光だと薄青くかがやいて見えたりする。不思議な色の髪。

彼女の強がりなのかもしれない、僕を安心させるための方便かもしれない。

でもライナは毎日髪を大切に手入れしていた。

体調が悪くて起き上がれない時は僕が手入れをしている。最初は断られたけど、何度か頼んだら触らせてくれるようになった。僕が櫛ですくと、ときどきすぐったそうに笑うんだ。

街の女の子がしている三つ編みを頭に巻き付ける髪型をしてあげた時は、何度も鏡をみて、照れくさそうに笑ってくれた。ライナにはいつも笑って欲しい。

でもライナの体の病気は年々酷くなって、笑顔も減っていった。

僕は試験を受けて街の学校に通うようになった。

勉強は面白くって、夢中になっていたら国一番の寄宿学校に通えるようになった。学費も援助金が出た。そこでたくさんの事を知って、僕には目標ができた。そのためになら三人と一緒に暮らすことができなくなつて、三日に一度しかライナに逢えなくなつても我慢できた。

ライナの体を元気にしたい。

隣国の青嶺国の王立学院にいけば、そういつた事を研究できると大人たちが言っていた。そして頑張れば、僕はそこに行けるかもしれない。

このまま順調にいけば、なんの問題もなかった。

「おいシメオン、学校はどうした」

「抜けてきました」

「お前な。青嶺の学院入試はそろそろなんだろう？ あそこに行けば身分は保障されるし、身寄りのないお前でもいい仕事に就けるんだぞ」

「ライナがどうなったのか心配なんです」

兄ちゃんの友達の騎士の人はため息をついて、暗い顔で僕を見た。「仕方ない。口止めされていたんだが…教えよう。彼女はもう助からないらしい」

ここで気を失っては駄目だ。指に力を入れて、手のひらの肉に爪を食い込ませて意識を保たせる。

「…そう言えば僕が大人しくなると？」

「違うんだ。サヴァから手紙が来たんだが、攫われていた間にかなり病状が悪化したらしい。青嶺国でもいまだに治療が見つからないそうだ。サヴァは諦めないつもりらしいが、正直、もう治療法が発見されても間に合うかどうか分からない状況らしい。周りはもうダメだと思っているよ」

世界から音が消えたように感じた。

何がライナを連れて行くこうとしている？

目の前の人間たち？

攫った組織？

「いいかシメオン、これは事実だ。受け止める。そして自分の未来に集中するんだ」

ライナがいない未来ってなんだ？ そこにいったい何の喜びがあるんだ？

僕は走った。

がむしゃらに走りに走って、いつの間にか見慣れない路地裏にたどりついて、思い出したように荒い呼吸をしていると、物影で緑色の外套を着た集団が女の子を捕まえて袋につめているのを見た。

気がついた時にはそいつらを叩きのめしていた。

それからそいつらの脳を法術で覗いて組織の施設の情報聞き出すと、片っ端から潰していった。潰した先からまた別の施設の情報が出てきたので、それも潰し、連鎖的にいろんな部署を探し出して潰しては情報を得て、また次の部署を潰していった。

簡単だった。単純作業のくりかえしだ。気に食わなければ徹底的に破壊したし、めんどくさくなればそのまま最寄りの騎士団の駐屯地に放り込んだ。以前本で読んで知った、周囲の気脈や自分の命脈を体力や筋力にかえる方法を使って、ほとんど休むことなく動きまわれた。

ライナを捕まえていた奴らもみつけた。なんだか知らない研究の、意味もわからない実験記録も見つけた。

見た瞬間、破壊した。何もかも。

僕からライナをうばうものは全て消す。

『消して消して、消してもライナは戻ってこないんだぞ』

そうささやきかける僕と

『なら全てを消してしまえばいい』

と、暴れまわる僕がいた。

ライナがいないと、僕は世界を感じられなくなる。それは純粹な

恐怖だった。足元に穴があいて、いつ自分がそこに落ちてしまうかわからない。落ちればきつと二度と戻る事はない。だけどその時は戻れなくなっても構わないと思っていた。

ライナがないのなら、何もかもに意味はない。

あらかた組織を潰しまわって、ついでに邪魔だった貴族とかの癒着も、国家間の裏の関係も、全部引っぱり出せるだけ引きずりだして、やることなくなると、すべてがどうでもよくなってしまつて、青嶺国から来た派遣部隊に投降した。

僕は危険人物として拘束され、そして牢に入つてようやく国の状態を知った。

その頃には追い詰められた秘密組織がなりふり構わず表立つて活動していて、国の騎士団が他国と協力してそれを鎮圧するために正面衝突をしていて、さらにその中で僕が好き勝手に暴れたから、収集がつかない状態になっていたらしい。

僕は取り調べを受ける中で人間じゃないとか、生きた災厄だとか色々言われたけれど、もう色々どうでも良かった。けれど、そこで青嶺国に行ったサヴァ兄ちゃんが、ライナを助けるために海の向こうへ旅立っていたことを知った。

部隊の中にいた紺色の髪の騎士が教えてくれた。

「あの男からの伝言だ『心配するな』だよ、坊主」

サヴァ兄ちゃんはいつも言葉が足りないんだ。情報が足りなくて何をどう心配したら良いかわからないんだよ。

なによりライナがどんな状態なのか分からないなんて、心配するしかないじゃないか。もしかしたら今もどこかで苦しんでじっと耐えているかもしれない。そう思うと落ち着かなくなつて、僕はまた暴れた。



牢の中で暴れていたら、部隊を率いてきた青嶺国の王子と一緒にいた、白金色の髪を持つ凄腕の法術師がどうしてだか牢にやってきて根気よく話を聴いてくれた。

なんでも法術師にはずっと探している人がいて、緑閑国の秘密組織にいるかもしれないから調べにきたのだという。結局その探している人は見つけれなかったらしいけど、力を貸してくれて、処刑される寸前だった僕を国外追放措置にして、生き延びさせてくれた。そしてどこからともなく一匹で帰って来たゲオルギを登録抹消扱いにしてくれて、僕につけてくれるよう緑閑国に働きかけてくれたのも彼と青嶺国の王子だった。

「あいつがここまで赤の他人に気を配るのは珍しい。お前に似たものを感じて同情したのかもな」

青嶺国の王子はそう言っていた。

あとでその法術師は白箔国の王だと教えてもらった。王様だけど、忙しい仕事の合間をぬってわざわざ、というか無理やり緑閑国まで来たらしい。

彼は別れ際に指の先くらいの小さな金色の石ころのようなものを渡して来た。発動した場所を記録して、あらかじめ設定した場所まで飛んで行くという、簡単だけれどかなり精密なつくりをした人工精霊だ。

「これを持って行ってください。そしてもし、くろやみ国、もしくは闇の国にたどり着いたら空へ放りなげてください。それで発動します」

「お前まだ例の国の事諦めてなかったのか」

彼の隣に立っていた青嶺国の王子が驚いたように言った。

「たどれる手は何でも使いますから」

彼の目は兄ちゃんの目に似て力強かった。

「いいよ。もしたどり着けたとして、詳しく調べなくていいの？」  
それくらいの恩がえしをしたいくらい、この人達には助けられた。  
「ええ。あとは自分でやります。あの人を失ったのは私の責任ですから」

そう言つて彼は水平線の向こうを見た。

「会えると良いね」

「君も」

ゲオルギの好きなように海の上を飛んでいると、案の定兄ちゃん達のところにたどり着くことができた。思ったとおりだった。だつてゲオルギは元気いっぱい、とても楽しそうにまっすぐひとつの方向をみて飛んでいたんだもの。

荒野しか無い島の、荒れ果てた港を目指すと、元気なライナがいた。笑顔で駆けてくるライナが！

ライナが純白の羽根を生やして、満面の笑顔でいたので、僕は一瞬、自分がゲオルギから墜落して、気がつかないうちに死んでしまったのではないかと思った。でも僕の知らない人や、見たことのない上級タイプの精霊もいたし、僕が国でやったことを知ったサヴァ兄ちゃんに無茶をするなと怒られたので、現実だとわかった。

ライナや兄ちゃんたちがいたのは、彼が言っていた国だった。その女王さまはとても優しい人で、陽だまりのようにあつたかい人だった。彼の探し人はもしかしたらと思ったけど、どうやらどちらにも事情がありそうだし、ライナの恩がある国だから深くは探らないことにした。

身体が元気になつても、ライナは傷だらけだった。

純白の羽根は綺麗だし、小さな銀色の角は可愛い。ライナも気に入っていると云っていた。

でも彼女の長い髪はぱつさりとなくなっていた。あれだけ大事にしていた自慢の髪が。ライナはなんともなさそうな顔で邪魔だから切ったと言ったけど、僕は組織の研究資料庫で彼女の髪を見ていた。番号が書かれた麻紐でくくられて、無造作に棚の中に置かれていた。僕の知らない所できつと沢山泣いたに違いない。それがとてつもなく悔しかった。

「確かにあそこで勝手に切られた時はとても悲しかったけど、もういいの」

ライナの瞳は一瞬陰り、それからきらきらと輝きだした。

「シメオン、私この国で頑張って生きてく。この身体、ファムさまに助けられたんだよ。見て、こんなに元気になったんだから！」

そう言っただけでライナは僕の両手を握る。とてもあつたかくって、力強い。

僕はずっと伝えられなかった言葉を、顔が赤くなるのを感じながら意を決して言った。

「ライナ、君がこの島国で暮らすなら、僕も一緒だ。僕、ライナが大好きだ。ずっと一緒にいよう」

離れ離れになって思い知らされた。僕はライナのことを好きでたまらないんだ。

ライナは握ったままの手を握手するように振りながら答える。

「うん。私もシメオンの事大好きだよ。兄さん達と一緒にファムさまを支えていこうね」

「ギュー」

僕達の横からゲオルギが顔を突っ込んで鼻先をライナになでつける。

「くすぐりたいよゲオルギ。もちろんゲオルギのことだっ  
て大好き！　ずっと一緒だからね」

そう言ってライナは笑ってゲオルギの固い皮膚で覆われた顔をぐりぐりとなでた。こんなに明るく笑うライナは初めて見た。

…うん。

ずっと一緒にいて、もうちょっと大きくなってから、分かってもらおう。

今はこれで、十分に幸せだ。

## ある少年の物語（後書き）

余談：紺色の髪の方は第三章の闘技場で兄さんと槍で闘ってた人です。実は顔見知りだった。

余談2：裏のタイトルは「某王様が頑張ってる姿をチラ見せ」

## 銀色の精霊、商売する 前（前書き）

くろの騎士と闘技場シリーズを読了推奨。  
本戦前日あたりの話。わりとぐだぐだ  
ネタバレ以上に、読んでいる前提でないと分かりにくいかと思いま  
す。

## 銀色の精霊、商売する 前

「え、物を売るにもお金が必要なんですか？」

黒髪の青年は灰色の瞳を見開いた。

「そりゃあんちゃん、騎士さん達の大会があるから外の者<sup>もん</sup>も店せるつちや出せるが、この街の中は場所も限られてんだ。それ相応の利用料金つてもんが必要になるんだよ」

闘技場脇の広場を取り仕切っている組合の窓口で、中年の男が白髪と茶色のおごひげを撫でながら言う。

青年はあごひげを不思議そうに眺めていたが、肩に止まった黒い小鳥が黒髪を突つつくと、はっと何かに気付いたかのように姿勢を正し、眉を寄せ困った表情を作る。

「困りましたね。じつは身内が大会に出場するので、その登録料で手持ちの予算が尽きているんです」

「しかたねえもんはしかたねえよ。次がんばんな」

中年男性はそっけなく言い、窓口から去っていった。

「何も効果ありませんでしたね。さて、どうしましょう…サヴァさんはまだ闘技場ですし…」

特に方法を思いつけず、とりあえず肩の小鳥に話しかけていると窓口の奥の机で書類作業をしていた女性がやってきた。

「おにいさんおにいさん」

「？ ワタシのことでしょうか」

「そうよ、黒髪のかっこいいおにいさん。いいこと教えてあげる。

街の中で出店をやるのは有料だけど、大会中は大通りで食べ物売るんじゃないのなら登録もお金も要らないんだよ」

「そうなのですか！」

女性は笑顔になった青年を見上げ、うつとりとした表情になる。

「でも、何かと登録しといたほうがいいかもよ、さ、ここにお名前書いてちょうだい。あと連絡先もね」

「えーと」

女性にペンを渡され、紙を差し出され戸惑う青年をまたしても小鳥が突つく。突かれた方はゆっくりとペンを置いて花が咲き乱れるかのような笑顔になり、女性の手をとる。

「情報をありがとうございます。やさしいお嬢さん。今は急いでいますので登録は後ほどさせて頂きますね」

そう言って手を少し掲げるようにして会釈をし、顔を赤くした女性を残し窓口からすばやく立ち去った。

「さすがですね」

目立たない程度の速さで通りを歩きながら青年がそう小声でささやくと、黒い小鳥は尾羽をぴんと伸ばし、胸を張った。

青年は闘技場を中心に広がる街から出て人目がなくなると、一気に駆け足となって郊外へと向かった。畑や木立が広がる辺りで灰色に塗装された荷車の側に立つ竜と灰色のシヨールを羽織った女性を発見する。黒い小鳥は青年の肩から飛び立つと竜の頭に飛び移った。

「待機ごころうさまです。大丈夫でしたか？」

「はい。ゲオルギがしっかり守ってくださいましたの」

そう言い、シヨールを羽織った女性は竜の黒い身体を撫でる。竜は退屈だったらしく、あくびをして返事をした。

「サヴァさんはまだ戻ってきていないようですね」

青年が見回すと、周囲には人つ子一人おらず、動くものは穏やかな風が畑の麦の穂と木々の葉を揺らすだけだった。

「見てください。昆虫というものを捕まえてみました」

女性が少々弾んだ声で握った手のひらを開くと、中から爪の先程度つやのある身体と、繊細な足を持った虫があり、甲羅のような背中を開いて薄くきらめく羽根を開き、どこかへ飛んで行った。



「飛んで行ってしまいました。せつかくお土産にしようと思いましたが」

そう言い、空に消えて行く虫を眺める表情は、同じ顔をした主とは随分違いどこか生命の活力というものが欠けたものだった。

「彼らにも自由があるのですよ。説明も説得もなしに連れて行つては可哀想です。あの昆虫は寿命中程の雄でしたから、連れて行くのなら妻子も同伴したいところでしょう」

「ならそれ相応の待遇も用意せねばなりませんね。おうちも広い方がいいでしょう」

青年と女性が真面目な顔をして飛び去った昆虫の家族について話しているのを、黒い小鳥と黒い竜は眠そうに眺めていた。

だいぶ日が陰り、辺りは薄暗くなって来た。

「戻ってきませんね。何か問題が起きているのでしょうか」

木の上の細い枝の上にそっと立り、街を見つめながら青年は言う。「そろそろあちらでは夕食の時間です。準備もありますし、ひとまずあなたは戻ってください。帰り道は大丈夫ですね？」

「はい。向こうではベウオルクトさんが迎えに来てくださるそうです。槍が出来たら持ってきますわ」

そう言うところを羽織っていた女性はお辞儀をすると小さなウサギの姿になって駆け出すと、かなりの速さで木立の向こうへ消えて行った。

それからさらに時間が経ち、すっかり日が暮れた頃になって黒い鎧を身にまとった戦士が現れた。

「遅かったですね」

「すまない。登録だけかと思ったら一般枠の予選も含まれていた」  
駆け寄ってきた黒い竜が顔をこすりつけてくるのを撫でてあやし  
ながら、鎧の戦士は言う。

「鎧の調子はどうですか？」

「まだ慣れないな。予選にのひとつに迷路競技があつたんだが、軽く走ったら勢いがつき過ぎて壁をぶち抜いてしまった」

そう言つてぶつけた場所らしき頭部をなでる。青年が見てみると、その箇所には傷ひとつついていなかった。

「予選の結果はどうでしたか？」

「なんとか明日の本予選に進める事になった。それと関係者用の身分証を貰つた。お前が入れるかどうかわからないが……」

「ワタシはやめておきましょう。ですが方法がありますので、当日槍を届ける事はできるでしょう」

「そうか。市場の方はどうだった」

「じつは少々予定外の事態になりました……」

簡単に野営の準備をしながら青年が事情を話すと、鎧の戦士は何度かうなずき、そして案を持ち出した。

闘技場のある街は朝から賑やかだった。

本日は一般枠と騎士達合同の本予選がある。実力者の騎士達は本戦から登場になるが、注目株は誰か、新人で有望なのは誰だ、本戦までいけそうなのは誰かなど話題には事欠かない。

この協闘大会を見る為に来た観光客と関係者で街は溢れかえっており、皆誰かと顔を会わせれば大会予想について話し込み、さらに街の住人達も日頃の仕事をしつつも店先や仕事場で盛り上がっている。それは参加や応援のためにやってきている騎士達も例外ではなく、その中でも熱心な者は前日行われた一般枠の予選にも足を運んでおり、その中で起きた珍しい出来事を周囲に話していた。

「今年は予選で目立つ奴がいるらしいですね」

「ああ。市民枠で参加なのに全身鎧の奴がいてよ。すっげえ変だった」

「無駄に金かけた武装している目立ちたがりは毎回いるんじゃないか。どこがどう変だったんだ？」

「俺、受付会場でそいつ見たぞ。真っ黒でよ、剣とか持ってねえ奴だろ。なんでか周りにいた傭兵達が怯えててよ、ただもんじゃないうぼかったぜ」

「そうそうそいつさ。予選見てたらぶっ飛んでてよ、迷路競技ん時どうしたと思う？ いきなり猛ダッシュしたかと思えば壁ぶち抜いてそのままゴールしちまいやがった」

「…それは失格にならないんですか？」

「あの迷路、組み立て式の壁だったが一応金属とコンクリートで作ったやつだぜ？ いままでそんな事した奴いねえから、結局合格判定でてたぞ」

「障害物レースでもそんな感じだったけな。飛び石を着地ついでに踏み抜いたんで足場が崩れた周りが脱落していったぜ」

「かなり凶暴で狡猾な奴ですね」

「面白そうな奴だ。本戦で闘えるといいな」

「そもそもお前が本戦いけるかが怪しいだろ、メールト。主力が法術のくせに選抜に残りやがって」

「戦略を立てているからちゃんと勝てているんだ。本戦ではお前にも負けないからな。ユミット」

「それはどうも、楽しみにしています。しかし黒い全身鎧ですか、どの様な武器を使うのか見てみたいですね」

「お、気になるか、武器マニア…おい見ろ」

彼らが見つめる先には人だかりの中で口上を述べる綺麗な顔立ちの青年と、極めて珍しい黒い竜。灰色の荷車、そして今まさに噂していた黒い鎧の戦士だった。

銀色の精霊、商売する 前（後書き）

終わらない。続きます

銀色の精霊、商売する 後（前書き）

長くなっちゃった・・・

## 銀色の精霊、商売する 後

黒い小鳥を肩に乗せ、人々の中心で黒髪の青年は両手を広げて朗ほがらかに言う。

「さあみなさん、見ていってください！ 世にも珍しい黒竜と、その使い手の“くろの騎士”ですよ！」

言い終わると青年はお辞儀をして微笑む。彼らを取り囲む人々は黒い竜と黒い鎧をももの珍しげに眺めるが、何人かの女性は熱心に青年を見つめていた。

「これからすごいものをお見せしますよ！ とくにご覧あれ！」

さあどうぞ！ と言わんばかりに紹介され、黒い鎧の戦士と黒い竜はしばし見つめ合う。

（「大道芸をすればいいと言ったのは俺だが…さて、何をすれば良いか。お前何かありますかゲオルギ？」）

（「ギュー…」）

両者が戸惑っていると、青年の肩に止まっていた黒い小鳥が間に飛び込んで来て地上に降り立ち右の翼を振った。

その動きを見て黒い鎧が右腕を無造作に上げると、それを合図にしたかのように黒い竜が地面に伏せた。

小鳥がさらに一声鳴くと、今度は右手を前へ差し出し、そこに竜が鋭い爪の並んだ前足を片方乗せた。

「……」

乗せた方も乗せられた方もこの行動にどう反応したらいいのかわ

からずにいたが、周囲はどよめいた。

「「おおお！」」

「り、竜が芸をしたぞ！」

「続きまして。さあ」

青年の掛け声に慌て、黒い鎧がとりあえずもう片方の手を差し出すと、竜は反対の前足も乗せ、それから回転して太くて力強い尻尾を乗せ、最後になんでも噛み砕きそうな顎を乗せた。

観客達はさらに驚き、やった方も驚いていた。

（「こういったことだけでも驚かれるものなんだな」）

（「この地方では竜の生息数はかなり少ないですから、珍しいのでしょう」）

幼い頃から竜と共に育ち、常に一緒にいると言っても過言ではない黒い鎧は、世間と感覚がずれていて、一般的によく訓練された竜でも簡単に芸などしないのだと知らなかった。

（あそこで大空らしき騎士達が興奮しているんだが…この騎士団にも騎竜はいるだろうに）

「すげえ！ 賢い奴だなアイツ！」

「あんなに簡単な命令でちゃんと動く竜は初めて見たぞ」

「黒い竜が、初めて見たが大人しいんだな」

観客の中に見知った制服を見かけて、黒の鎧はさらに混乱した。

「さて続きましては」

そう言うつと黒髪の青年は荷車からいくつかの果物を盛った籠を取り出し、離れた位置から竜に向かって林檎を放り投げた。

黒い竜は口で受け止め、満足そうに噛み砕いて飲み込んだ。続いて様々な方向へ果物が放り投げられるが、素早く追いかけて、ひとつも落とさずぱくりぱくりと食べていく。

人々はまた拍手をした。

「お客様の手にナイフを持っている方はいませんか？」

「小型の投げナイフならありますよ」

青年が尋ねると、観客の中にいた騎士が答えた。

「ありがとうございます。お借りしますね」

差し出されたそれを受け取ると、青年は鞘から抜いて手のひらを超える長さほどの刃を手に取りざつと確認すると、黒い鎧に渡して距離をとる。

「いきますよ。そおれ」

そしてオレンジを投げた。

ナイフで模擬戦でもするのかと思っていた黒い鎧は慌てて腕を動かした。その腕が思っていた以上に素早くかつ自由に動かせたのに驚きつつ、彼は空中でオレンジを六等分した。

青年がすかさず両手を差し出し、いつの間にか持っていた皿で受け止める。

「今度はこちらを」

次々に投げられた果物を黒い鎧は難なく切り分けていき、青年が持つ皿には果物が山盛りになった。

最後に大きめの瓜を黒い鎧が輪切りにして、ナイフは騎士に返された。

「これで我々の出し物は終了です。最後までみて頂いたみなさん、ありがとうございます」

その言葉と共に青年は深くお辞儀をし、一步遅れて黒い鎧も礼をした。その横で黒い竜が小箱を青年の足元に置いた。

「楽しんでいただけましたら、こちらにお気持ちをお願いします」  
彼らを観ていた人々はこぞって小箱の中に金属製の貨幣を投げ入れる。予想以上の量に青年が内心驚いていると肩にとまった黒い小鳥が青年の髪を引っ張る。

「そうでした。皆さん、こちらは“無料”ですので、どうぞ！今日は見て下さりありがとうございます！」



観客に礼を言いながら青年は黒い鎧が切り分けた果物を配る。

「面白い奴らがいるな。あの竜、うちで買い取れないかな」

「どうしたユミット、ひどく真剣な顔つきで」

「さっき貸したナイフ、実は刃こぼれしていたから修理にだそうとしていたやつなんです」

「あ？　だがあの黒い鎧は普通に使ってたろ」

「見てください。刃がこんなに鋭くなっています。すっかり別物ですよ。法術でもこういったことは一瞬でできるものではない」

「あの司会の男もただ者じゃなかったってことか。どこから来た奴らなんだろうか」

「“くろの騎士”か。闘えるのが楽しみですね」

後日、彼らが大空騎士団の上司に大会で圧倒的な強さを見せた正体不明の“くろの騎士”についての報告を求められた際、「通りで竜と一緒に大道芸をしていました」と報告し、上司達の混乱を深めた。

「そろそろ本予選の時間だ。レーヘン、俺は闘技場へ行く」

「わかりました。落ち合う場所は昨日と同じ場所で」

「わかった」

そう言葉を交わし、黒い鎧は青年と竜を残し闘技場へ向かった。

「兄ちゃんよ、この林檎どこ産なんだい。えらく味がいいな」

引き続き御礼の言葉と共に人々に果物を配っていた青年に話しかける男がいた。

「ここからずっと海のほうの小さな国のものです。えーと、本当はこれ売りに来たのですがで出店を出す余裕がなくて」

肩にとまった黒い小鳥に髪を引つ張られながら、青年は答えた。

「うちはこの街で青果店を出してるんだが、量があるんならちよつと見せてくれないかい」

「いいですよ。乾燥させたものもあります。どれも甘くて美味しいんですよ」

「そうかい。おお、こりや質のいいもんばかりだな。実は商品の仕入れが騎士さんたちの大会に間に合わなくなつてな。よかつたらうちで売らないか」

「それはありがたいことです。ぜひお願いします」  
青年は微笑んだ。

「それで、どうしてこうなつたのでしょうか」  
青年は首をかしげた。

「あんた商売しにきたんだろ、顔もいいし、うちの出店手伝つてくれよ。ちゃんと買い取つた果物の代金と別に賃金も払うからよ。な！」

男に笑顔で肩をたたかれ、台車に繋がれた竜を見る。黒い竜は口を大きく開かないよう革製のベルトが取り付けられている。

「窮屈じゃないかい？…コスプレ？ 随分と変わった言葉を知っているね。まあ君が いいのなら」

竜の頭に止まっていた黒い小鳥がピチピチと鳴く。

「大丈夫ですよ。ゲオルギも手伝つてくれますし、さすがに五百年はかかりませんで」

「準備いいかい？ 台車が倒れないよう気をつけてついてきてくれ」  
青果店の男に案内されて広場へ着くと、そこは人でごった返していた。色とりどりの布を張った屋台や出店が並び、様々な物を売っている。

「お、兄ちゃん。なんだそいつら」

「おう、やってるか。今日は稼ぎ時だからな、大道芸の兄さんを助っ人で呼んできた」

「よろしくおねがいます」

「おお、べっぴんの兄ちゃん、よろしく頼むわ。げ、そこにいるの竜じゃねえか！」

「大人しいですよ。頭が良いので人間を襲ったりしませんよ」

果物を売る出店のところで男によく似た別の男が出迎えた。簡単に挨拶をして、仕事について教わる。

「箱に入ったものは種類ごとに値段が書いてあるから一つずつその値段で売ってくれ。まとまって売るものは袋やカゴに書いてある。

あとはその壁に値段表吊るしてあるからよ」

「はい」

「あとは果物を包むのはこれな」

「はい（包む…持って帰るために包装するんですね）」

「代金計算用の計算尺は値段表の横に置いてあるから自由に使ってくれ」

「はい（けいさんじゃくつてなんでしょう…ああそいつたものなのですか）」

「…なあ、あんた、わからないことがあったら肩の鳥じゃなくて俺に聞いてくれよ。それなんかの芸か？」

「ああ、すみません。ついつい癖になっけていまして」

「…いいけどよ。午後から来るはずだった手伝いが来れないんで、正直助かるわ。しっかり売ってくれよ」

「はい」

青年は頑張った。釣り計算も商品の包装もはじめはまごついたがしつかりとこなし、始終爽やかな笑顔で道行く人に「おいしい果物はいかがですか」と声をかけ、人足が途絶えると黒い竜と一緒にまた大道芸をして人目を集めた。

果物を買った客の中にはずっと話しかけてくる者がいたり、竜を売ってくれなどと言ってくる者もいたが、そのたびに黒い小鳥が助言をしてなんとか言い抜けた。

青年は少々驚いていた。かつて人の街をさまよいながら五百年か

けて人探しをしていた自分が、これほどまで人々としっかりとしたやりとりが出来るとは考えもしなかった。だが、主に助言をもらい、仲間助けられることで、ここまでしっかり任務をこなせている。（「これはベウォルクトへの良い土産話になりそうです！」）

「あら美味しそう」

かけられた声に顔をあげれば、銀縁の眼鏡をかけた女性が立ち止まってドライフルーツの包みを見ていた。隣にいる紫色の髪の男性がささず懐から財布を出す。

「その棚にあるものを全てください」

「はい」

青年は手早く全てを包み、代金を受け取って男に渡した。

「ユリア」

男性は瞳をきらめかせ、受け取った包を女性へ手渡す。

「ありがとうございます。夜食によさそうですね。これだけあれば待機室の差し入れにちょうどいいです。あとで代金半分払いますね」

「これはユリアにと……。いや代金はいらない」

女性は礼を言うが、男の望むものではなかったらしい。残念そうな表情をしているが女性は気づかず竜に意識を向けていた。

「珍しい。黒くて可愛い竜ですね」

「ありがとうございます」

「この子は何を食べますか？」

「果物が多いですかね。よかったらどうぞ」

青年が渡したオレンジを受け取り、女性は竜に差し出す。竜は器用にオレンジをくわえて、美味しそうに食べる。

「このオレンジ、五つほどくださいな」

「はい。ありがとうございます」

女性は購入したオレンジを紫の髪の男性に渡す。

「美味しそうですね。買ってみました。エシル。どうぞ」

男性はそつと両手で受け取り、微笑んだ。

「ああ、ありがとう。あとで一緒に待機室で食べよう」

男女が店を立ち去った後、青年の肩にとまった小鳥がため息を付いた。

「お疲れですか？ 身体に不調が出たら接続を切って休んでくださいね」

元気だといった風に、だが力なく首を振る小鳥を青年は見つめるしかなかった。

「今日はありがとうな。助かったわ。これ兄貴から預かった果物買い取り代金と、今日の手間賃な」

夜になり、出店の片付けまでをすべて終えるまで手伝い、青年は代金を受け取った。

「ありがとうございます。これで喜んでもらえます」

「お、良い顔しやがるな。故郷に大事な人でもいるのか」

「ええ。とても大切な方です。あまり出歩けない方なので、こうして叶えられるだけ望みを叶えてあげたいんです」

青年は微笑む。日中の微笑みとはまるで違う、深さと柔らかみのあるものだった。

「じゃあ土産でも買ってくといい。大会期間中はいろんなもんが売ってるからよ」

「はい」

肩にとまったまま眠る小鳥をやさしく撫でながら、青年は言った。

## レーベンボーフの話 前（本編関係なし）（前書き）

2011年4月1日の活動報告に書いてたもしもネタを書いてみました。

本編ほとんど関係ないです。

## レーベンボーフの話 前（本編関係なし）

深夜に当たる時間、レーヘンが城の中を歩いていると突然空間のねじれを感じた。

精霊が作れるレベルの何とかなりそうな程度のものだったので、ベウオルクトに状況を説明して、そのまま巻き込まれてみることにした。

「どなたかがワタシに用があるみたいですね」

一瞬全身にノイズが走る感覚があり、瞬きをすると以前と変わらず城内だった。

「？」

城のシステムを触ってみてもそう違いを感じなかったが、ところどころ知らない構造を感じた。興味はあったが、ひとまず人や精霊の気配が集まっている感覚がある王の間へ向かうことにする。

「レーヘン！」

王の間に行くと、ファム女王が駆け寄ってきた。近づくと、いきなり胸のあたりをたたいてくる。

「ない！ アナタはレーヘンだわ！」

「？ どうしたんですかファムさま」

「ようこそ、平行世界のワタシ」

少し高く響く声がして、見ると“外見は違うのに個体として自分と同一の存在”がいた。

「アナタはどなたですか？」

警戒して女王を背後にかばうようにして立つと、相手はくすりと

笑う。

「いきなり呼び出して申し訳ない。女王とワタシよ」

「ということは、この方はワタシの次元のファムさまですか」

自分だけならまだしも、女王も勝手に連れてきたことに不快感を覚え、レーヘンは眉間に皺をつくり相手を睨む。

「気がついたらいきなり目の前に女性版レーヘンがいたのよ。どういことなの」

「…女？」

女王の言葉に、見れば相手の外見は自分とは少し違っていた。

銀髪は一緒だがあちらのほうがやや長く、サイドを細かい三つ編みにしてまとめている。服装も、肩周りをふくらませた濃い灰色のワンピースに、上から光沢の無い白っぽいものを巻きつけており、ワンピースの下には黒のストッキングと、くるぶし丈までのヒールの高い編み上げブーツを履いている。

よく観察すれば体型も違うようだった。身長はあちらのほうがやや低く、その分の質量が胸囲と足腰についている。

レーヘンは2、3度瞬きをした。

自分と同じ個人情報を持つ相手は、人間の女性の姿をしていた。

レーヘンが相手を認識したのと同時に、相手はこの状況を楽しむかのように笑みを浮かべた。

「アナタ、レーヘンじゃないし、お城もなんかちょっと違うし。ここはどこよ」

不安なのかレーヘンの背にすがりつつも女王は気丈に目の前の“別のレーヘン”に問いかける。

「ワタシの名はレーベンボーフ」

そう告げると、レーベンボーフは上体をかがめて礼をした。

「ここは、貴方方がいたのとは違う、別次元のくろやみ国です」



\*\*\*

「実はお願いがあり、ワタシが呼びました」

レーベンボーフは王の間にテーブルと椅子を出し、どこからともなく取り出したティーセットでお茶を淹れはじめた。

きつちりと時間を測って茶葉を蒸し、金属製のポットからガラス製のティーカップへ注ぐと音も立てずソーサーごとそつと女王の前に置く。

「どうぞ」

「あ、ありがとう」

口をつけると女王は目を見開いた。

「おいしい……」

レーベンボーフはその言葉を聞いて微笑み、茶請けとしてクリームを挟んだビスケットを花柄のトレイに乗せて差し出すと再び口を開いた。

「貴方たちの次元と、この次元は数ある平行世界のなかでもかなり近しいものなのです」

「平行世界？」

「この世の動きにゆらぎをもたらすための、ささやかな分岐から生まれる“もしも”の世界です。本来ならそれぞれが互いの存在に気づくことはありませんし、こうして接触することはありません」

「ですが、この次元のワタシは精霊の力で干渉してこの場を設けているようですね」

女王の問いに、レーベンボーフが答え、レーヘンが続ける。

「理屈はわからないけれど、目の前の事実からどういうものなのかなんとかなくわかったわ」

眉間に皺をよせつつも、女王は目の前の銀髪の子を見比べ、頷きながら言った。

「理解が早い主さまです<sup>あるじ</sup>」

レーベンボーフの笑みが深まった。

「それで、私たちに何の用なの？ 正直、出来ることなんてあんまりないと思うけど」

女王がビスクケットを口に運びながら首を傾げる。

「実は相談に乗っていただきたいのです。ワタシと、ワタシの主フイムさまのことで」

「フイム？ ファムじゃなくて？」

「ええ。この次元での我が主はフイムさま。15歳の男子です」  
思わずレーヘンはファムを見た。

この人が男性？

視線を受けてファムもレーヘンを見返す。自分を指さしながら

「私が男？ しかも年下？」

「ええ。貴方たちの次元ではくろやみ国の王は女性ですが、ここでは逆なのです」

レーベンボーフがゆっくりと頷いた。

「じ、じゅうございって…」

女王は何故かそこに驚いているようだ。

「ボーフー!!」

王の間に慌ただしい足音が近づき、扉を蹴り開ける者がいた。

「また訓練中にベウオが襲ってきたんだけど！ なんとかしてよ！」  
入ってきたのは黒い瞳の少年だった。黒髪をレーヘンほどの長さで整え、灰色と黒の丈夫そうな服をきている。

「襲っているではありません。これはじゃれついているのです」  
高く透き通る声を聞いて、レーヘンは少年が抱えている存在に気づいた。

灰色の布を目と額にまいた、小柄な少女。人間に換算すれば4〜6歳あたりの体格。服装は灰色の生地を多く使った足元まで裾があるもので、布に覆われていない箇所から見える肌は石のように白く、

髪は背中までの真っ直ぐな白っぽい銀髪だった。幅の広い袖の先からは猛禽類を思わせる銀色の鋭い爪が覗いている。

「まさか…ベウォルクト？」

数百年以上年上の、落ち着いた先輩精霊のまさかの子供姿は自分の女姿を確認した時以上の衝撃だった。

「こんにちは、別次元のレーベンボーフ」

「ん？ あんたらどなた？ ボーフ、お客さん？」

少年は近づくと思つ直ぐこちらを見上げてきた。

「ええ。ワタシが呼んだ別次元のワタシ達ですよ。フイムさま」

レーベンボーフの言葉に、少年は目を丸くする。その表情は女王によく似ていた。

「なにそれ！　じゃあこの格好良い兄さんはレーベンボーフなの！？」

すごい、すごいと、フイムははしゃぎながらレーヘンを見上げる。フイムに抱えられた少女版ベウォルクトも一緒に見上げてくるので、レーヘンは落ち着かない気分になってきた。

「じゃあ、こつちの人は俺なの？」

「どーもこんにちは、『私』」

女王が腕組みしながら微笑む。

「ふーん、よろしく『俺』」

別次元の主は年上の女性である自分にどう接すればいいのかわからないらしく、首をかしげながら挨拶する。

「ボーフさんに言われてマフィンを持つてきました」

フイムの背後から銀髪と同じ顔した少年が現れる。

「ありがとうございます。ハース」

こちらにも影霊は存在するらしい。

「主さま、客人も交えておやつにしましょう」

レーエンボーフはそう告げると新たに茶を淹れ始めた。

フィムとハースはテーブルにつき、ベウォルクトは退屈だつつぐやいて王の間を出て行った。体重についてぶつぶついながらも女王は新しく出て来た菓子にも手を伸ばす。

「このマフィンすつごくおいしい。誰が焼いたの？」

「ワタシですが」

「ボーフはどんな料理でも作れるし、すつごく美味しいんだよね」

レーヘンは自慢げなフィムの言葉に嫌な予感を覚えた。

女王が毅然とした目付きでこちらを見る。

「ずるい！ レーヘン、やっぱり料理覚えなさい！」

「えええ〜」

レーベンボーフの話 前（本編関係なし）（後書き）

続きます。

“ せいれいのちから ” って便利

## レーベンボーフの話 中（本編関係なし）

\*\*\*

「へえ、こつちにもサヴァはいるのね」

「サヴァは女騎士ですごく強いんだ。時々稽古付けてもらってる」

「サヴァの騎竜のゲイラ、あとは弟のレネとシオンっていう女の子がいます。今はみんな闘技場の方にでかけてるんで不在ですが」

フィムがマフィンにかじりつく横で、ハースが行儀よく籠からマフィンを自分の皿に取りながら言う。

「ああその時期なのね、今」

ひとくちマフィンを食べると、女王は少年王を見た。

「じゃあ今あれの準備ですごく忙しいんじゃない？」

「あれ？」

「今度海の上であるじゃない。私なんて毎日頭爆発しそうよ」

女王は最近王の間で資料に向かって文句を言いながら頭をかかえていることがある。あれはそういった意味があつたのだ。いつ女王の頭蓋が爆発してもいいよう、今度その光景を見たら医療器材を持つて待機していようとレーヘンは決意した。

「フィムさまは諸国合同で行われる会合に不参加を表明しました」

レーベンボーフがお茶のおかわりを用意しながら言った。

「え、そうなの？ どうして？ みんなに色々言われなかったの？」

不思議そうな顔をして女王は尋ねる。彼女は初めは会合に参加するのに難色を示していたが、国民と精霊に説得され今は前向きに準

備をすすめている。

「それは・・・」

「いいんだ！ 俺はここでゆっくり過ごしていたいんだから！」

言葉が続けようとするレーベンボーフを遮る形でそう言うと、用事があるからとフィムは王の間を出て行った。

「相談事とは、もしかして彼のことでですか？」

レーヘンがフィムが去っていった扉を眺めながら言う。女王はあんな風に会話を止めて逃走するようなことはしない。

「ええ」

レーベンボーフは寂しそうに言う。

「フィムさまには立派な帝王になつていただきたいのです。ご本人も当初はそう望まれていました。ですが、最近のフィムさまあまりものことに積極的ではなくなり、ワタシやベウオルクトとも『信頼関係』というものがうまく築けていないようなのです」

「信頼関係ね・・・」

「数ある並行次元の中で、“国主と精霊”として一番関係が良好な貴方がたに教えを乞いたいのです」

そう言われ、レーヘンは誇らしい気分になった。女王には時々叱られるが、嫌われたり、無視されたり、遠慮されたことは一度もないのだ。

「私とレーヘンは別に関係ないと思うわ」

女王はカップのお茶を飲み干しながらあっさりと言ったので、レーヘンはちよつとショックを覚える。

「この国の一日の流れ、詳しく教えてくれない？」

レーベンボーフは不思議そうな顔をしながら、ハースと共にこの世界のくろやみ国の一日について説明した。ひととおり聞き終わると、女王は何かを納得していた。

「ここでは家事とかみんなあなた達がやってるから、人間が暇なの

ね。だから信頼関係も築けていないんだわ。ご飯の時間もみんなバラバラだなんて、こんな広いお城の中じゃ一日顔を合わさない事にもなっちゃうじゃないの。うちでも朝と晩は一緒に食べるようにしているわよ」

フィムは孤独になっているのだと、女王は言う。精霊だけでなく周りの国民たちとも交流が足りていないのだと。

「精霊でも人間でもいいから、とにかくみなでやる仕事を増やすの。お城の設備チェックとか、身の回りの掃除とかそういうの。一緒に作業すれば何か喋るだろうし、交流も深まるわ」

言われてみればレーヘンの次元の女王と国民たちは身の回りのことはなるべく自分たちでこなしていた。城のシステムも使うが頼り切らず（使い方がよく分からないかららしい）、精霊にすべて任せず（あてに出来ないと言われた）、特に食べることに關しては（精霊達が何もしないので）女王を中心に熱心に動いており、果樹園での収穫や材料の加工にも手間と時間をかけ、毎日違う料理を作っている。

レーベンボーフと比べるとレーヘンは何もしていないように思えていたが、これはこれでいいらしい。

「ワタシとフィムさまの關係はどうなのでしょうか」

「アナタの外見が年上の女性だからあまり強く出られないんじゃない？ きつとあの子、アナタの事大切にしたいのよ」

うまく育てれば将来きつといい男になると、女王はなにやら頷いている。

「どうすればきこちなさが減るのでしょうか」

「うーん、会話が増えればいいと思うけど。美味しい料理作ってあげるとか？ でも毎日だと嬉しさも減るかもしれないわね」

「あの、女として喜ばせて差し上げるのはまずいのでしょうか」

レーヘンボーフの言葉に女王の顔がひきつった。

「まさか…寢室に忍びこむとかやってないでしょうね？」



女性姿の精霊は顔をしかめる。やったらしい。

「ずいぶんと大胆な精霊ねえ」

「それ以来距離を置かれるようになりました」

「警戒されているのよ。あの子も白箔国出身なら、私と価値観も近いはずよ。いい？ 親しき仲にもちゃんと礼儀つて必要なのよ？」

そう言つと女王は立ち上がり指を一本立てる。

「ちなみにうちでは、精霊であろうと幼馴染みであろうと夜に女の子の部屋へ家族以外の異性が尋ねてはいけない決まりになっているの」

続けてもう一本指を立てる。

「それと、共同で使う大浴場の利用時間もちゃんと別。着替えを見るのも厳禁！ うちのレーヘンはそのあたりしっかり守らせているわ」

「何度も叱られましたから」

一度入浴中に足を滑らせた女王を助けようとして侵入し、その後数時間にわたり王の間で正座させられたこともある。

「躰は大事よ」

そこで何かを思いついたらしく、女王は笑顔になりレーベンボーフを見る。

「フイムがまだ国を取りまとめられないなら、アナタがやればいいわ」

「ワタシがですか」

「主をアナタが鍛えればいいんじゃない？ そつち方面で躰の上手い人がうちの国にいるんだけど、ちょっと呼び出せる？」

「え、ええ」

レーヘンはあんまり良くない予感がしたが、自分と同じ存在が押し黙ってしまう状況が珍しいので、黙って観察することにした。

## レーベンボーフの話 後（本編関係なし）

\*\*\*

女王の説明を聞いた後、王の間を出ていったレーベンボーフは数分経たずに一人の女性を連れて戻って来た。

「なんだ？」

前髪だけは長いが短く整えられた銀髪、黒の細身のパンツに光沢のある淡い灰色のワイシャツ。そして高いヒールのショートブーツを履いた女性、元血霧の女帝ことマルハレータがそこに立っていた。

「旅の途中呼び出してごめんなさい。身体は大丈夫？ 実はね……」

「……ふうん。別次元ね」

マルハレータはどこか眠そうな顔で女王の説明を聞き、たいして興味なさそうに頷いた。

「まあ、大体事情はわかった。ところで、こっちにはおれみたいなものもいるのか？」

「ええ」

王の間に現れたのは細身の男性だった。マルハレータの男性版と言って良い。長い銀髪を背後で束ね、黒い上下を来て首にゆるく赤いボンタイをしめている。男性の隣には小柄な少女が寄り添っていた。

男となにやら言葉を交わしていたマルハレータはいきなり相手にキレだした。

「おれに似た顔でんな情けないこと言ってんじゃねえ。クソつまねえ男だな！」

「貴様こそ、可愛げのない女だ！」

「はっ、てめーに振舞う愛想なんざない持ち合わせちゃいないからな」

額をぶつけ合うかのように睨み合い、熾烈なガンの飛ばしあいが始まる。

「あれ、同属嫌悪っていうんじゃないかしら」

手は出ていないが口喧嘩を始めた二人を遠くから眺めながら、女王があごに手をあてて言う。

「どっちもどっちってことですね」

レーヘンは女王の隣で言った。

そのうち言い合いは規模が大きくなり、ついにマルハレータの我慢が切れて蹴りが出た。いきなりの蹴りによるめく男にさらに蹴りを入れようと近づくマルハレータに立ちはだかる者がいた。

「レーモントさまをいじめないで！」

男に寄り添っていた少女だった。同じように銀髪だが二本の三つ編みにまとめられており、暗い銀色の瞳をしている。レース飾りのついた黒いワンピースを着て、同じく黒色の光沢のある丸みをおびたブーツを履いており、背中には身体に不釣り合いな大きさの合皮の縦に長いケースを背負っていた。

いきなり飛び出してきた少女の姿に目を丸くし、マルハレータは足を引いた。

「ローズ、やめろ」

レーモントという名らしき男性版マルハレータが焦りながら少女をどけようとするが、少女は頑として動かない。その様子を見て、マルハレータは目を細める。

「こっちのあいつか…別人だな」

「お前のところにもいるのか。どんなのなんだ」

レーモントに問われ、マルハレータは前髪をかきあげながら言う。  
「あー、男だ。目付きが悪くて、バカで、お前より図体がでかい」  
「そ、そうか。この子が…大男…」

己の腰のあたりにしがみつく少女を見下ろし、レーモントは顔をひきつらせる。

マルハレータは近づくと屈みこみ、少女と目線を合わせた。

「なあ、お前、この男のこと好きか？」

「はい、大好きです！」

花もほころぶような可憐な笑顔だった。レーモントはその言語に優しく笑みを浮かべ、少女の髪を撫でた。その光景を見て、マルハレータはしかめ面をした。彼女は続けて問いかける。

「そうか。ローズといったか。お前自分の命で男の命が助かると言われたらどうする？」

「私の命を差し出します」

少女は迷いなく言った。

「この男はやめろと言っても？」

「レーモントさまが死んじやうなんて絶対に駄目です。レーモントさまがいない世界なんて世界じゃないです」

「そうか」

まっすぐな視線を受け止め、何かを納得したらしくマルハレータはひとつ頷くとこちらへ戻ってきた。

「平行世界だな」

「あれでわかるのね」

「ああ」

\*\*\*

目を開けると、いつもの私のお城のだった。

女性版のレーヘンとか、男の子の私とかが出てくるかなり変わった夢をみた。本当に夢だったのかなんだったのか分からないけれど、思うところがあってレーヘンにお茶を淹れさせたら、すごい味になって出てきた。

「あちらのワタシと同じようにしたのに。どうしてでしょうか」

そう言っただけ銀髪の精霊が納得いかない風に首をかしげていたので、あれはどうも夢ではないみたい。

あっちの私、すこしはいい男になるといいわね。

\*\*\*

「女の俺は帰ったの？」

「ええ。先ほど。貴方によろしくとおっしゃってました」

「そうか」

「フイムさま、今でもヴィルヘルミナ嬢に会いたいですか？」

「会いたい…けど…俺、もうここから出られないんだろ？」

フイムは暗い表情で言う。この子のこんな表情が増えたのはいつ頃からだろうか

「何故諦めるのです？ 探せば手段などいくらでも見つかるでしょう」

現に、女性のあなたは諦めていませんでしたよ

あえてその言葉にはせず、レーベンボーフは目の前の少年を見下ろす。

「でも…あいつ貴族だし…」

「早く強い王になってヴィルヘルミナを迎えに行くと意気込んでいたのを、もうお忘れで？」

「あれは、その」

尻窄みになって消えた言葉にレーベンボーフの片眉がぴくりと動

いた。

「客人が言っていたのですが」

銀髪の精霊はうつむき、前髪に表情が隠れる。

「煮え切らない男ほど情けないものはないそうですよ。強くなりた  
いのでは無いのですか？」

「な、なりたいたいさ！ そりゃあ」

その言葉を聞き、レーベンボーフは微笑んだ。そしておもむろに  
指先を伸ばすと変形させ、ロープのようにしなるそれを勢い良く地  
面へ叩きつける。

空気を振動させるほどの衝撃音が響きわたった。

「そうですか、それではさらに強くなるためにワタシも協力させて  
いただきますね」

「な、なんだそれ」

「ムチです。調教用のもので、音は派手ですが痛みは弱いそうです。  
皮膚を一枚ほど弾け飛ばす程度ですから、声なんて出さないでくだ  
さいね」

ムチのしなり具合を確認しながらレーベンボーフはゆっくりとフ  
ィムへと向かって歩き出す。かかとのヒールが床とがぶつかり、硬  
質な音が王の間に響き渡る。フィムは後ずさるうとしたが出来なか  
った。なぜだか足が動かない。

「我が主人が一刻も早く世界に覇をととなえられるよう、ワタシが鍛  
え上げて差し上げましょう」

レーベンボーフは血のように真っ赤な薔薇が初めて花開いたかの  
ように、鮮やかに微笑んだ。

\*\*\*

「他の次元の私たちって仲が悪いのかしら？」

「気になります？」

「ちよつとはね」

「おそらくワタシでも調べようと思えば出来ますが」

「うーん…やらなくていいわ。私たちは私たちよ。それ以外の可能性なんか知ったってしょうがないわ。アナタもそう考えてちょうだい」

「はい、ファムさま」

レーヘンは微笑んだ。主を世界の覇者にしたいと望む精霊が参考にするために我々を選んで呼び出したのだ。つまりこの次元の女王の未来はそれに近いということなのだろう。

「大丈夫です。ファムさまにはワタシがついています」  
「につこり笑う銀髪の青年姿の精霊を見て、

「いまいち安心できないけれど、まあ頼りにしてるわ」  
女王はそうつぶやいた。

レーベンボーフの話 後（本編関係なし）（後書き）

あとがき：

おあそび企画の話なのでざっくりした内容です。おあそびなのでレーベンボーフさんも肩の力が抜けた感じになってますね。  
レーベンボーフ姐さんはレーベンよりしっかりしているので、おつかいもしっかりこなして、うっかりもなさそうですね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6237p/>

---

くろやみ国の番外編

2011年10月30日00時15分発行